タダシイ冒険の仕方【改訂版】

イグコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タダシイ冒険の仕方【改訂版】

【Ｎコード】
Ｎ３９０１Ｙ

【作者名】
イグコ

【あらすじ】

「プラティニ学園」ローラス共和国最大の冒険者育成機関である。そこへ通う主人公リジアは魔術師を目指すソーサラークラスに所属。愉快で気の合う仲間に囲まれながらも、ちょっと困った事態に陥っていた。無事、立派な冒険者に成るために卒業を目指す、若い見習い達のお話し。――剣と魔法の異世界を舞台にしたちょっと懐かしい雰囲気のライトノベル風ファンタジー。分割していたものを改訂しながら一つに纏めさせてもらいます。

黒の魔女たち

わたしの一日は悪魔の話しで始まる。

「悪魔召喚なんてリスク高すぎるよね。得られるメリットもデメリットに比べて魅力無いし。術式一つ間違えただけで異界に飲み込まれるなんて、試そうって気にもなれないもん」

「命と交換しても世界をぶっ潰したいとか、狂人ならのめり込むのかもな」

目の前のクラスメイト、黒髪の優等生ロレンツはわたしの乙女らしからぬ話題に眉間に皺寄せつつも頷く。わたしは向かう机の傍らに置いてあった魔術書をぽんぽんと叩いた。

「でも魔術書なんて難しいものになればなるほど、未完成な部分が多いじゃない。わたし達が勉強してる魔術書にも間違いや欠落箇所があったら、って思うと不安になってこない？」

身を乗り出すわたしの真横、廊下に面した窓がゆっくりと開いて気難しい顔が覗く。

「建前だけは一丁前だな、リジア・ファウラー」

こちらを見下ろすのはプラティニ学園ソーサラークラスの教官。わたしの学年の学年主任を務めるメザリオ教官である。名前を呼ばれたわたしは思わず立ち上がった。

「は、はい！」

広い教室にわたしの声が響き渡る。何事かといった様子で振り返るクラスメイトは全員が真っ黒のローブを着こんでいて、目だけが爛々としているように見えた。

メザリオ教官は自慢の口髭を触る癖を見せた後、教室中に聞こえるよう声を張り上げる。

「今日の『古代語魔法』の授業は実習だ！全員、第一演習場までくるように」

それを聞いて一気に気分が落ち込む。皆が立ち上がりがやがやと

騒がしくなる中、わたしは少々わざとらしいまでに大きなため息をついた。

「実習か。今日の被害はどれほどかねえ……」

肩を竦めるロレンツにわたしは魔術書を振り上げる。が、さらりと避けられてしまった。睨むわたしとせせら笑うロレンツ。そこへメザリオ教官が「馬鹿共」と割って入る。

「ロレンツ・ダフィネ、お前は授業前の準備として演習場に結界を張っておいてくれ。あと、手本を見せてもらうからそのつもりで」

教官に言われたロレンツは眼鏡の下の顔を露骨に歪めた。

「優等生は大変ねえ。教官から頼りにされちゃって」

去っていくメザリオ教官の緑色のローブを眺めながらわたしが言うと、ロレンツは立ち上がり口を開く。

「まったく嫌になるよな。単に優秀なだけで仕事が増えるんだから。お前が羨ましいぜ」

ぽんぽんと出る嫌味にかっとして彼の黒いローブに手を伸ばすが、またしても軽く身を引かれ、ロレンツは口笛吹きつつ教室を出て行ってしまった。

教官の前で実際に魔法を披露する実習の授業はわたしが最も嫌いなものの一つだ。それでも授業を抜けるわけにはいかない。肩を落としながらわたしも教室を出た。

真っ黒のローブが廊下にずらずらと並ぶ様子は見慣れない人から見たら異様な光景に違いない。でもここプラティニ学園魔術師科では当たり前の光景だ。魔術師を目指すソーサラークラスでは黒のローブを着ることが主流になっているのだ。

「今日も可愛い格好ね、リジア。貴方の金髪によく合ってる色だと思うわ」

そう言ってわたしの腕を取ってきたのはクラスメイトのキーラ。彼女自身の見事な金髪がかき上げられると女のわたしでも見とれるような美人の顔が現れる。どこか大人びた雰囲気の彼女はいつも皆を一歩引いたところで見ている、そんな人だ。キーラの豊満な胸が

腕に当たり、わたしは赤面する。
「どうして黒のローブが嫌いなの？」
わたしの薄いラベンダー色のローブを触りながらキーラが尋ねてくる。わたしは口を尖らせつつ答えた。
「……可愛くないから」
それに対してキーラは嬉しそうにくすくす笑った。
「まあ別に魔術師が黒いローブを着る、なんて決まり事は無いしね。……ほら、隣りのクラスの派手なこと」
ちょうど通り掛かった教室の中をキーラは指差す。『プリーストクラス』、わたしの所属するソーサラークラスの隣りにあるクラスだ。ソーサラークラスが魔術師を目指すクラスならプリーストクラスは神官、巫女といった神職者を目指すクラスになる。同じ魔術師科だがプリーストクラスは華やかだ。それぞれが自分の信仰する神のシンボルカラーに沿ったローブを身に纏っているので白、青、赤といった鮮やかなものが多い。
ローブも華やかなら顔も華やか。清楚で可愛い子が多い、というのも学園での通説になっている。間違っても朝からデーモンの話しをする子はいない。同じ魔法を習う女子多めの構成なのにソーサラークラスとは対極といえる。
そんな華やかな女の園の中、一際目立つ姿が教室の中心に見える。クラスメイトの女の子達に囲まれ笑顔を振り撒く美男子。肩まである綺麗な金髪に青い瞳、そして端正な顔をした彼はヴィクトル・アズナブールという。白地に金の刺繍が入った豪華なローブを着こなす姿は王族のようにも見えた。のだが、
「やだあ！アンタってば大胆なのねえ！」
廊下まで響き渡るオカマボイスに隣りにいるキーラがふふ、と笑う。
「今日も元気ね、『ローザちゃん』」
見た目はイケメン王子様、中身は乙女のオカマちゃんヴィクトル・アズナブール――通称『ローザちゃん』はここプラティニ学園の名

物でもあった。

「ロレンツ・ダフィネ、前に出なさい」

「はい」

メザリオ教官の指示に立ち上がると、ロレンツは広い演習場内を歩いていく。いやらしく眼鏡を上げながら大きな的の前に立つと、呪文を唱えていった。彼の声に空気中を漂う未知の粒子、マナが応え、震える。

やがてロレンツの胸の前に赤い火の玉が現れる。凝縮したマグマのようなそれは、的を指差すロレンツの動作に合わせて飛んでいく。

「ファイアーボール！」

灰色の的に当たった瞬間、轟音が鳴り響く。爆発した火の玉が視界を赤く染めた。思わず目を瞑る生徒もいる。特殊素材で出来た灰色の巨大な的は形こそ保っているが、着弾した箇所が赤黒く染まっていた。

「お見事！」

メザリオ教官の声につられて皆、ロレンツに拍手した。照れくささの裏返しなのかロレンツの気難しい顔が更に仏頂面に変わった。

「さ、次は一人ずつ私の前で披露してもらうぞ。並んで並んで」

教官に言われて率先して前に並ぶ者、わたしと同じように小さくなりながら後ろの方に並ぶ者、その差は自信の有る無しに違いない。出来れば逃げ出したいわたしは最後尾に並び、『永遠に列が途切れなきゃいいのに』と思いながら痛くなってきたお腹を摩った。

一人一人順番に『ファイアーボール』を披露していく。ロレンツと同じように綺麗に的へ当てる人もいれば、豪快に天井へと放ってしまう人もいる。かと思えば的まで届かず床に小さな焦げを作るだけの臆病な人もいた。魔法というのは個人の性格が表れやすいのだ。

その全てが建物に被害を出していないのは、普段から演習場一帯に教官達が施した結界が何重にも張られているからだ。ロレンツが

先程頼まれたのは「ダメ押し」なのだ。そこまで慎重になる理由には、今日の実習がファイアーボールという比較的攻撃力の高い魔法であることと、もう一つある。

「……最後か。リジア・ファウラー、さ、やってみなさい」

心なしか教官の声が裏返る。周りにいる皆の空気も一変し、ぴんと張り詰めた。ごくり、と喉を鳴らしたのはわたし本人だけじゃなかったはずだ。

わたしはつっかえつっかえしながら呪文を唱えていく。つっかえるのは呪文の詠唱の暗記が覚束ないからではない。不安だからだった。

やがてわたしの胸の前に現れた火の球に演習場がざわつき始める。皆のものより明らかに大きくわたしの背丈の半分は有りそうなファイアーボールの火の玉は、形もいびつに変わりまくり汚い。

「ファイアーボール！」

わたしのヤケクソの発動の言葉の後、演習場には生徒の恐怖の悲鳴が響き渡った。

「いやー！」

「やだ！こっち来ないでよ！」

わたしの放った火の玉は的へ飛ぶどころかゆらゆらと不気味な動きで演習場内を漂い始める。右へいったり左へ行ったり、生きているかのように飛び回った。

「お、落ち着け！落ち着いて外へでなささい！」

自身も全く落ち着いていない声でメザリオ教官が叫んだ。火の玉が動くたびに絶望したような悲鳴の合唱。わたしはといえばただ唖然と腰を抜かしているだけだった。

「ばか！お前も出るんだよ！」

ロレンツがわたしの腕を引っ張り持ち上げる。我に返ったわたしは入り口へと走った。その瞬間、地面を揺らす爆音が後方から響き渡り、足がふらつく。振り返ると厳重な結界を施してあるはずの演習場の壁が一部消え去り、表の美しい空を覗かせていた。

一瞬の遅れの後に襲いかかる熱風に息が止まる。「火事よ！」という叫びの通り、演習場に炎が広がり始めている。危険が来襲した際に鳴り響く警報が非日常感を加速させた。

「どうした！？」

「生徒は無事か！？」

駆けつけた他の教官達の無事を確認する声に混じって「またかよ……」という呆れの声もする。

全員の無事を確認した教官達が消火活動を開始する後ろで、わたしはひたすら冷たい視線に晒された。

「はあ……、本当勘弁して欲しいわ」

「自爆するなら勝手だけどね。巻き込まれるのは御免よ……」

クラスメイトのひそひそとする声に小さくなるしかない。普段なら「言いたいことあるなら目の前で言えば」とでも言い放つところだが、今はわたしが百パーセント、十割、全面的に悪いのだ。

演習場前の外廊下に面したグラウンドが騒がしくなる。

「うひゃー！すげえな！」

がやがやと騒がしい声は学園のファイタークラスの生徒達のものだった。戦士としてのノウハウを身につけるクラスにいる彼らはグラウンドでの訓練中だったらしく、抜き身の武器を持つ手を休めてこちらを見ていた。

こちらは冷ややかな視線、というわけではないが男の子達に好奇の視線を浴びて、わたしも含め周りの皆は大人しくなる。

「見世物じゃないわよ。あっち行って」

キーラがしっしっ、と手を振って追い払う集団の中、一人の男の子を見つけたわたしは素早く皆の後ろに隠れる。銀髪が揺れる綺麗な顔の少年はしばらくこちらを眺めた後、クラスの男の子達と一緒に去っていった。

エルフの歌声

ここプラティニ学園はローラス共和国最大の『冒険者育成機関』である。

なんでも故プラティニ氏が５０年近く昔に「これからは育成の時代だ！」と数々の戦果をあげてきたモンスターハントをやめて、故郷ローラスの古い町、ウェリスペルトに戻り魔導師協会と冒険者ギルドを総合したようなものを作ったのが始まりらしい。

ローラスも王政から共和制に移り『侵略戦争は悪である』という風潮になってきた現在、人と人との争いは減ったものの、世に蔓延るモンスターは増加の一途を辿っている。ここローラスの一都市、ウェリスペルトでもたびたびモンスターによる被害を受けていた。

人と交われない種族達から人類を守る為に存在するのが剣や魔法に長けた冒険者なのだ。

でもそんな救世主的な目標ではなく、この学園に通う生徒達の間では古代遺跡や未知の土地へ到達するような、旅物語に憧れて冒険家を目指す人の方が多いと思う。わたしもその一人だ。

ファイター（戦士）、シーフ（盗賊）といった冒険者グループには欠かせない職業全ての学び舎としてウェリスペルトに門を構えるここに、わたしはソーサラー（魔術師）の卵として入学した。魔法のまの字も無い両親から生まれたのだが、わたしの才能に気付いた近所に住む占い師に学園に通うことを勧められ、わたしもそれを希望したのだった。

しかし、今現在といえば入学当初の希望や輝いていた日々も消え失せていた。

まただ、またやってしまった。

そんな思いから沈みきった気分でわたしはとぼとぼと歩く。次の

授業は教室でのわたしの一番好きな世界史の時間だ。でもそんなことはどうでも良かった。

グラウンドの脇を歩きながら真っ青な空を眺め、真っ黒いローブが訳もなく憎たらしい気分になっていた。

「リジア！」

校舎の入り口に向かうわたしの足が止まる。見上げれば二階の窓から金髪に青い目の美しい顔が覗いて、わたしに向かって手を振っていた。ヴィクトル・アズナヴール、通称ローザちゃん。そしてわたしの学園内での唯一の親友だったりする。

「ちょっと待ってて」

そう言い終えるとローザは顔を引っ込めた。わたしは学園の時計塔を見上げる。半世紀前の学園創立から時を刻み続けている荘厳な姿が、次の授業まで少し間があることを告げていた。

「まーたやっちゃったの？」

ローザが校舎入り口から現れるなりわたしに聞いてくる。

「またやっちゃったよ……。ファイアーボールの実習だったからシャレになってなかった」

肩を落とすわたしにローザは「おおふ……」と呻いた。そして、

「ちょっと座んなさいな」

と校舎脇にあるベンチを勧めてくる。

「そう落ち込むこともないわよ。また皆から色々言われたかもしれないけど、あたしの予想だとリジアの事を『羨ましい』って人もいると思うの」

わたしの隣りにぴったりと座り、ローザの言った台詞にわたしは首を傾げる。彼女、いや彼、いややっぱ彼女の綺麗な青い瞳を覗き込んだ。

「ほら、制御出来ないぐらい魔力が大きいってことは、ゆくゆくは凄い大魔女になれるかもしれないってことよ！魔力が大きい人はそれだけ強い魔法も使えるんだし、どんなに唱えても疲れないってあたしも羨ましいわあ」

「ロレンツはちゃんとコントロールして制御出来てるし、わたしは大きい魔法ほど暴走が酷くなってるよ」

わたしの間を置かない答えにローザは頬を引きつらせる。そして大きく溜息をついた。

「そんなこと言わないで、ちょっと前向きになってくれなきゃ……」

そこまで言うとローザはわたしの顔を覗き見る。

「何だかいつも以上の落ち込みようね。何かあった？」

「いやあ……騒ぎにファイタークラスの人まで駆けつけちゃったから、恥ずかしくて」

そう答えるとローザは「ふうん？」と曖昧に頷いた。

実は『ファイタークラスの一人に好きな人がいる』というのを、わたしは親友である彼女にも言っていない。そしてこれが今回の酷い落ち込みの理由だった。先程の集団の中にちらりと見えた銀髪の少年は、あの騒ぎにどう思ったのだろう。とっさに隠れてしまったけど、きっと周りから「誰の仕業か」は聞いただろうし。

「ああー！もうやだ！穴に入って一生出たくない気分」

わたしが頭を抱えた時だった。空気がちりちりと震えた気がした。次の瞬間、右手に見えていた隣りの校舎の窓が次々に割れていく。

「ひい！」

ローザの野太い悲鳴が聞こえたのも一瞬のことで、すぐに別の雑音にかき消される。

「な、に、よ、これ……」

きっとわたしのうめき声も聞こえていないだろう。両手で必死に耳を塞ぎ、うずくまる。肌までひりつかせる不快音の波。辺りに響き渡る巨大な音の波は、脳髄までかき乱すような破壊力を持っていた。頭を抱え込んだ体勢のまま地面に這い蹲り、ただただ耐える。

「終わった……？」

ローザが動き出すのを見てわたしも恐る恐る耳から手を外す。何の音もしない学園内に鼓膜がイカレたかと不安になる。が、

「あっちの校舎って『バードクラス』の、よね？」

ローザの声にほっとする。わたしは彼女の指差す先を見て顔を歪めた。
「また『あのエルフ』じゃないわよね」
「他に何があるのよ」
ローザの呟きに近い返事を聞く。わたし達は顔を見合わせると、隣りの校舎に駆け出した。

植え込みを乗り越え、散乱するガラスの破片を避けながら問題の校舎に近づく。光を遮るものが綺麗さっぱり無くなってしまった窓から中を見ると、見知った姿が現れた。
「なんだ、暇人共」
そう言って翡翠色の瞳で睨んでくる一人の青年。真っ白の肌に少々目つきは悪いが美しい顔。黒い髪から覗く耳は人のそれより大きく尖っている。そう、彼はエルフ族である。
「なんだ、じゃないわよ、アルフレートおおお！」
わたしの怒りの声にアルフレート・ロイエンタールはひょい、と肩を竦めた。エルフには珍しい黒髪が揺れる。真っ黒に見えるが日に透けると深い藍色をしていた。人間とは色素が異なるのかもしれない。
その彼が細身の体の脇に抱える楽器を見て、わたしは身を乗り出した。
「あんた『また』歌ったのね！？なんで余計なことするのよ！」
彼の抱える小さめの銀のハープ。その美しい装飾が哀れに見える程、彼は酷い音痴なのだ。いや音痴、などという言葉に当てはめていいものか。歩く鼓膜破壊機器であるアルフレートはわたしと同じように学園で疎まれている一人である。
「さっき、演習場から派手な爆音がしたなあ。何だったんだ？」
しらじらしい質問と共に目元に手を当て、窓の外へ視線を動かすアルフレートをわたしは押し戻す。

「そんなのはどうでもいいの！何で歌ったのよ！？窓ガラス割るの何回目？」

その質問にアルフレートは校舎の中を指し示す。ローザと一緒に差された先を覗き見ると、アルフレートが立つ後ろに見える教室に一人の教官が倒れていた。

「大変！」

ローザが悲鳴を上げつつ校舎内に侵入する。その後をわたしも追う。

泡を吹いて白目を剥いている哀れな教官にローザが治癒の魔法を唱える。その光景を前に、

「『呪歌』のテストだったんだ」

アルフレートはつまらなそうに言い放った。ならしょうがない……のだろうか。わたしも似たような状況で先程の騒ぎを起こしたのは間違いない。わたしはもう一度アルフレートを見る。

「他の生徒は？」

「テストは一人ずつだったから、隣りの教室にいる」

その答えに嫌な予感がしたわたしとローザは顔を見合わせた。うめき声を上げるまで意識を回復させた若い教官は一先ず置いておいて、隣りの教室までやってくる。扉の上部にある小窓までもが綺麗に割れていた。

「……ああ」

ローザが絶望したように膝をつく。開いた扉から見える教室内には、テスト待ちだったのであろうアルフレートのクラスメイト達が、楽器を手に持ったままの姿で倒れていた。全員が引き付けを起こしたように崩れている姿はホラーだ。

「緊急事態よ……。リジア、プリーストクラスの子達を集めて来て。授業始まる時間になっちゃうけど、この状況じゃ教官も許してくれるでしょう」

ローザの指示にわたしは頷き、その場を駆け出そうとする。

「アンタも行くのよ！」

ローザがアルフレートのお尻を蹴飛ばした時だった。
「学園の二大破壊王が今日は大活躍だね」
子供のような甲高い声にわたしは窓を見る。窓枠に座り込む可愛らしい姿が四つ。全員がにやにやとこちらを見ていた。就学前の子供ほどの背丈に猫のような耳、尻尾が生えた彼らは『モロロ族』という種族だ。その中の一人、茶色い髪にクリーム色の耳をしたモロロ族が廊下に降り立つ。
「この時期にあんまり悪目立ちしない方がいいんじゃないの？」
「どういう意味よ、フロロ」
わたしはモロロ族のリーダー格である彼の名前を呼ぶ。フロロはその丸い顔ににやーっと笑みを浮かべた。
「五期生に上がったっていうのに暢気なもんだね。今年からいよいよパーティ組み始めるっていうのに」
フロロの言葉に漸くはっとする。そうだ……、今年からわたしは学園の五期生に上がったんだ。そろそろ実際に冒険に赴くパーティを組まなきゃいけない時期じゃないの。
「果たして『破壊王』と組んでくれる奇特な人は見つかるのかねー！」
そう叫びながらモロロ族四人は廊下を駆けていく。
「ちょ、待ちなさい！野次馬ばっかしてないで呼びに行くの手伝ってよー！」
わたしは思わず追いかけるが、足の速さなら数いる種族の中でもトップクラスのモロロ族に追いつくことは出来なかった。「うきょきょー！」という腹の立つ笑い声が遠ざかっていく。
仕方が無い、このままの足でプリーストクラスに向かうか、とむかむかした気持ちで校舎の出口を目指す。ごおん、とお腹に響く音で鐘が一度鳴る。まずい、予鈴だ。無責任だけどプリースト達を呼んだら、自分は授業に駆け込まなきゃ。
見えてきた表の明かりに廊下を曲がりかけた時、わたしは慌てて足を止め、身を隠す。校舎の入り口の開け放たれた扉の前にいるの

は、先程のモロロ族に囲まれた銀髪の少年の姿。その長い足にまとわりつくモロロ族の一人一人の頭を撫でると微笑む。わたしはその光景にぽーっと見とれてしまっていた。

彼らがいなくなってからふと気がつく。……アルフレートがいない。わたしは再びむかむかとしながら走り出した。

電波女

予想外にぽーっとしていた時間は長かったらしい。魔術師科の校舎に戻った時には授業が既に始まっていた、という失態を犯したわたしは忍び足で再び表に出る。

こうなったらサボりだ。幸い世界史の授業は年度始めなので適当なお話しで終わるはずである。そして何故か世界史だけは成績の方も無駄に良かったりするので、色々な意味で余裕があった。

校舎を出るとグラウンドを眺める。再びファイタークラスの威勢の良い声と姿を見つけ、咄嗟に植え込みに隠れるものの期待した彼の姿は無かった。

そのままその場にしゃがみ込み、ぼんやりとしながら暇を潰す事にする。

パーティメンバー集めか……。わたしに出来るんだろうか。

先程のフロロの話しを思い出し、溜息が漏れた。

プラティニ学園では五期生から本格的な冒険へ出る『校外授業』が始まる。同じ学年でメンバーを募り、パーティを組んで学園が用意したクエストに出掛けるのだ。

パーティ組みに教官達が絡む事は余り無く、生徒達は自分達の手でパーティを作り上げる。もちろん全員が魔術師などという「パーティとしての機能が得られていないもの」は不可になる。

スムーズにバランス良く仲間を集められるか、も冒険者にとって重要なスキルなのだ。毎年この時期になると五期生達が慌しく仲間集めに翻弄しているのは見てきたはずなのに、ころっと忘れてしまっていた。学年全体の人数に比べてソーサラークラスの生徒は少ないので、嫌でもあぶれることはないかな、なんて甘い考えもあったことは否定しない。しかしフロロの言葉で急激に不安が押し寄せる。

わたしが他の人の立場だった場合、自分と組みたいと思うだろうか……。はっきり言って自信ない。魔法は駄目、どころか暴走の連

続で周りの命が危ないレベル。キーラのように何にもしなくても良いから傍に置いておきたい！と思わせるような美貌も無い。それどころか黒に混じって一人だけ派手なローブ着込んでるって『イタイ子』扱いなんじゃ……。

今更になって嫌な汗が吹き出た。

「ま、まあキーラには『可愛い』って褒めてもらったしね」

意味の無い慰めの言葉を吐いた時だった。

「どっせい！」

威勢のいい掛け声と共に頬を何かが掠める。植え込みをメキメキとなぎ倒しながら現れたそれは、勢いそのままに後ろの校舎の壁を叩きつけた。ごうん！という衝突音と飛散する壁の破片。

「ひ、ひえー！ひえええー！！」

情けない悲鳴を上げながら壁に出来たクレーターを凝視する。校舎の壁にめり込むのは棘棘の付いた巨大なウォーハンマーだった。腰を抜かすわたしの頭上から可愛らしいがどこか棒読みな声がする。

「リジアじゃないですかあ」

振り返る先にいたのは黒髪の美少女。ぱっちりお目目の人形のような顔にウェーブした美しい髪。ピンクのギンガムチェックのミニスカートワンピースの上に、フリフリのエプロン。ツインテールの髪型といい『ロリータファッション』というやつだろうか。肩に背負い戻したウォーハンマーが大分浮いている。

その彼女を睨みつつ「出たな、電波女……」とわたしは呟いた。

「そんな所にいたら危ないですよお？」

間延びする声にわたしは立ち上がり怒鳴る。

「危ないって！あんたに危なくされたのよ、イルヴァ！」

彼女の名前を呼ぶと目の前の電波女――イルヴァ・フリュクベリは唇に指を当て答える。

「うさぎさんかと思ったんです」

その答えにわたしは絶望と共に崩れ落ちる。わ、分からない。その答えが、意味が、何もかも……。

イルヴァ・フリュクベリはわたしが知る中でも最も不思議な生物である。まず彼女はファイタークラスの生徒のはずなのだが、いつもこんな謎のコスプレ姿だった。ファイタークラスの生徒といえば皆、動きやすいズボンにブーツ、上は革鎧や防護服が一般的だ。そんな中で彼女だけは今日のようなロリータファッションや時代から丸ごと間違えたようなお姫様ドレス、きわどい水着やらボンデージ、かと思えばフルプレートアーマーなどとにかく幅広い。

極めつけがこの会話の成り立たない『電波』さだった。無表情が崩れるところを見たことがなく、口を開いたかと思えば意味の分からない言葉が飛び出るのだ。彼女の場合に限っては「演技であって欲しい」と思ってしまう。

再び立ち上がり、膝についた葉っぱを払っているとイルヴァに手を取られる。

「リジア！イルヴァとパーティ組みません？」

「え！？」

言われたわたしは一瞬、笑顔になる。が、直ぐに眉間に皺寄せた。イルヴァは電波だがファイタークラスの生徒だ。わたしが一番知り合いのいないクラスだったりするので、この誘いは少し嬉しい、のだが……。

『破壊王』と『電波女』、これ以上危険な組み合わせも無い気がする。他のメンバーを探すにあたって、こんなに強力な敬遠される要素を作っていいものだろうか。

午前中の授業のコマが全て終わり、わたしは窓の外を見ながら伸びをする。五期生に上がってからは極端に授業数が減るので、今日わたしが受ける授業はすべて終わっていた。

がやがやと騒がしくなる教室内、さて、お昼ご飯は何にしようかなー？などと考えていると、教室にメザリオ教官が入ってくる。どことなく空気が張り詰め、自然と全員が席に戻った。

「昼休憩に入る前に一つ連絡事項を伝えておくぞ。えー、諸君も既に知っていると思うが、来週から『演習』が開始される。クエストを受諾出来る状態になる……その前のテストだな」

全て周知の事だったが、メザリオ教官から改めて話しが上がると、やはり皆の雰囲気も変わる。テスト、といっても普段受ける古代語のテストや魔術理論のテストとはわけが違う。五、六期生はクエストを受けることで単位を稼いでいかなくてはならないのだから、実質この『演習』のテストを乗り越えなければ卒業は無い。

もちろんこれ以降も学園に通うのは変わりないが、四期生までに比べれば少ない授業の単位取りの為と、主に情報収集に集まることになる。『半冒険者』のような立場になるわけだ。

「演習にはパーティを組んだ者から参加する。パーティメンバー編成書は今日の放課後から受付だ。ぼうっとして乗り遅れるなよー」

普段には無い軽い調子の教官の口調に気遣いを感じた。皆が緊張した状態なのを分かっているのだろう。そこへ一人のクラスメイトが手を上げた。

「あのう、演習って具体的に何をするんでしょう？」

教官は頷く。

「演習は組んだメンバーと一緒に実際にクエストをこなしてもらう。ただ先輩達が今やってるような本格的なものではないぞ。簡単なものを選り分けて、現地には教官達が一度足を運んでいる。あんまり心配するな」

そうは言っても学園の外で行動を起こすのは、ソーサラークラスのような『引き篭もり』たちには初めての経験だった。ざわざわと不安の声が漏れ出す。

「これこれ、静かに！まずはメンバー集めだ。人数は四人から六人、クラスをなるべく被らせないこと。これに乗り遅れたら演習には出られないんだから、まずはこっちに集中しなさい。来週から演習が始まるんだから、当然締め切りはそれまでだからな」

それを聞いてなのか後ろの席から声がする。

「……でもソーサラーは少ないから余らないし、大丈夫よね」
「まあね、でも変な人と組むことになったら大変じゃん」
「きっと卒業してからもずっとの付き合いになるわけだもんねー。深刻よ」
「ファイタークラスは人数多いから大変みたいよ。一パーティに三人以上は厳しいし、余った人は強制的に傭兵訓練に回されるから」
「それ考えると魔術師科にきて良かったと思うわー」
「……まあうちのクラスでも敬遠されそうな問題児もいるから、さ」
「しい！聞こえるわよ……でも仲間に背後から撃たれちゃ堪んないわよね、くく」
わたしの事ですかー！と頭に血が上る。がたん、と椅子を引いた時だった。
「リジアー！！」
ばこん！という軽快な音と共に教室のドアが吹っ飛ぶ。「ひ！」という悲鳴が上がった。視線の集まる入り口に立つのはウォーハンマー片手に仁王立ちした電波女の姿。
「リジア！イルヴァとパーティ組みましょう！」
豊満なバストを自慢するかのように胸を張るイルヴァに立ちくらみがする。隣りにいたロレンツが肩を叩いてきた。
「もう仲間いるなんてすげーじゃん。お似合いなんじゃない？」
厭味なのか何なのか判断つかないその言葉に、わたしはイルヴァと初めて会った日のことを思い出していた。

「趣味が合うかと思って」
共通の知人が紹介してくれた女の姿にわたしは「どういう意味だ！」と言いたくなるのをなんとか堪えた。
ウサギ耳のカチューシャにハイレグカットの水着、網タイツを着たコスプレ女と趣味が合うとは思えなかったが、わたしは頬を引き攣らせつつも握手の手を伸ばす。

それに応えながら「にへ」と笑ったのがイルヴァだったのだ。

「リジアー！イルヴァと……」

「わわわかったわよ！」

わたしは慌ててイルヴァの腕を取り、教室から連れ出す。後ろから教官の「……まだ終わってないぞ」という呟きが聞こえるが、気付かない振りをして逃げ出した。

「イルヴァと組んでくれるんですね？じゃあこれからずっと一緒ですねえ」

廊下を駆ける後ろからイルヴァの嬉しそうな声がする。そう、自分で言うと恥ずかしいがイルヴァはわたしが大好きなのだ。なぜこんなにも懐かれたのか謎でしょうがない。教官からも派手すぎる服装に多少の小言を受けたことはあるわたしだったが、コスプレの趣味は無い。

「じゃあこの調子でどんどんメンバー見つけましょう！」

とてもポジティブな台詞を無表情のまま叫ぶイルヴァに「分かったわよ」と小声で返した。

猫の企み

とりあえず昼食にしよう、と提案するとイルヴァは、
「お弁当取りに行っていいですか？」
と窓から別の校舎を指差す。頷くもののわたしはどきりとしてしまった。彼女が指差すのは、当たり前だが彼女の所属するファイタークラスの校舎。馴染みの無い校舎に入るというのは緊張するものだし、この時間だともしかしたら『彼』がいるかもしれない。ファイタークラスは人数が多いので二クラスあり、イルヴァとは別のクラスなのは知っているが教室は隣りのはずだった。
「イルヴァ今日ねえ、五段弁当なんですよ」
すらっとしているが大食漢であるイルヴァがわくわくした声を上げる。
「ふうん、わたしはパンか何か買わなきゃ……」
そう答えながらもそわそわしてしまった。
グラウンドを抜けて戦士達の集まる校舎に入る。ファイタークラスはやっぱり男の子が多いので校舎の雰囲気からして違う気がしてしまう。騒がしくてちょっと汚い、かな。
二階だという五期生の教室のあるフロアに上がると、直ぐに視線が集まるのを感じた。「早速メンバー集めかな」というような好奇の目もあるが、視線が合いそうになると露骨に逸らす人もいる。イルヴァとわたしの顔を交互に見て、露骨にぎょっとする人にはさすがにムッとしてしまう。
そちらに気を取られていると、イルヴァが景気いい声を上げる。
「おべんとー！」
謎の掛け声と共に教室の扉を勢いよく開け放った。中にいた集団が呆気に取られた顔でこちらを見ている。机の上に座りパンなどを齧っているところを見ると彼らも昼食中だったらしい。目を丸くしたまま固まっている男の子達の中、銀髪に端正な顔をした一人を見

つけてわたしは飛び上がった。
「あ、間違えちゃいました。こっちです、こっち」
思考停止寸前のわたしの腕をイルヴァが引っ張る。先程開け放った扉の教室とは別の隣りの教室に入ると、イルヴァは室内後ろにあるロッカーを開ける。中から巨大な弁当袋を取り出して頬ずりした。
「……ねえ、ねえねえねえ！」
我に返ったわたしはイルヴァに詰め寄る。
「こうなったらさ、イルヴァと上手くやっていこうと思ってるよ！？でもさ、もうちょっと落ち着いた行動取れない！？とりあえず扉は静かに開けようよ！」
『彼』を含めた集団に一気に注目を浴びた恥ずかしさから、涙目になる。が、イルヴァは唇に指を当てて暢気に答えた。
「んー、イルヴァ扉に入る前から意識が中に飛んじゃうんです。扉があった瞬間からイルヴァは中にいるんですよ」
すーっと引いていく自分が分かる。この娘をコントロールしようとした自分が馬鹿なのだ。
溜息と共に廊下に出る。恥の上塗りをする前に急いで校舎を出よう、と思った時だった。
「イルヴァと組んだの？唯でさえ問題児だってのに、どこ目指してるのかわかんない人だね、アンタ」
生意気な声に顔を上げると又してもモロロ族四人が窓辺に腰掛け、こちらをにやにやと見ている。二階だというのに身軽な彼らには関係ないらしい。始めは睨みつけていたわたしだが、今の発言をしたフロロの顔を見て思いつく。
「そうだ、フロロもわたしと組まない？」
「いいぜ」
思わぬ即答に聞いた自分がびっくりする。フロロは生意気でムカつくことも多いが、シーフクラスでは成績優秀のエリートだったからだ。
フロロは軽い身のこなしで廊下に降り立つと、わたしとイルヴァ

に不敵な笑みを見せる。子供のような顔のくせに何ともイケメンな態度だが、フロロの茶の髪と栗色の瞳、クリーム色の耳と尻尾というのはモロロ族の中でも『一番モテる色合い』だそうだ。現に他のモロロ族三人は黒髪や赤茶髪をしており、尚且つフロロをリーダーとして崇めているようだった。

「俺だって単に友情なんて絆で組むんじゃないぜ？俺には匂ってくるものがあるんだな」

フロロの言葉にイルヴァは自分の腕の匂いを嗅ぎ、わたしはフロロと出会った日の事を思い出していた。

フロロとわたしが仲良くなったのは、今思えばほんの偶然だった。図書室で居残り勉強をしている時、わたしは粗方片付いたレポートを前に大きく背伸びをした。ふと前を見ると、向かいのテーブルで何やら分厚い本と妙な金属片を交互に睨めっこしている人物がいる。それがフロロだった。

何をしているのかさっぱりだったが、妙に気になり見ていると、どうやら本を参考に金属片を分解しているようだ。頭をかいたり汗を拭ったり、ため息をついたり忙しい彼をおもしろく思い、近づいて一言、

「そのでっぱり押しながらそこ引っ張ってみたら？」

なんてことを適当に言ってみた。

すると彼の顔がみるみる険しくなり、わたしはやばい、と思ったのだが、次の瞬間、かちっと何かが外れる音がした。

「外れた…」

惚けたように彼は呟くと、がばっ、とわたしの手を取り、

「アラームのレベル１０を外すことが出来たぜ！ありがとう！」

意味のわからないわたしの手をぶんぶんと振り回したのだった。

それからというもの、

「リジアといると奇跡が降ってくる気がする」

なんてことを言いながらわたしの周りをうろちょろとしているのだった。

フロロとイルヴァに挟まれながら移動し、いつも昼食を取っている中庭に着く。噴水が中央にある芝生の上に数組の生徒達がいた。その中の一つ、異様な雰囲気を出す二人組みに近づいていく。

「……どうしたの？」

わたしがそう声を掛けたのは白地に金の刺繍が入った美しいローブを着るプリースト、ローザ。綺麗な顔を歪めてメソメソと泣いている。その彼女が寄りかかっている人物は、露骨に嫌な顔をしてこちらを見た。

「早く何とかしろ」

偉そうな口調でエルフのアルフレートはわたし達三人を睨んできた。

「慰めろって？曲芸でも見せりゃいいのかい？」

その場に飛び跳ねるフロロにアルフレートは舌打ちする。

「その減らず口を慰める方向に役立てろよ、フロロ」

「アルの方こそ嫌味ばっかりで、人の慰め方はわかんないんだろー？」

言い合う二人の異種族の横でイルヴァがローザの頭を撫でた。

「どうしました、ローザさん？オカマが原因でいじめられました？」

「その遠慮が少しも無い言い様がムカつくけど、そうかもしれないわあ……」

そう零しながら漸く顔を上げたローザの話しを聞いていく。

プリーストクラスもわたし達と同じ時間に、教官から『演習』の説明を受けていたらしい。一通り終わった後、教室を出ると知り合いのソーサラーがいたので話し掛けたのだが、何も言わずに物凄い勢いで逃げていったのだという。

「あたし、自分で言うのもなんだけど司祭としての腕前はちゃんと

してると思うし、避けられる要素としては『このキャラ』しか考えられなくて」

めそめそするローザの話しを聞いて、数年前もこんな事があったっけな、と思い出す。

入学して直ぐは今のプリーストクラスとソーサラークラス、一緒の『魔術師クラス』として編成されていたので、わたしとローザは同じクラスだった。その魔術師クラスの一番初めの授業、自己紹介の時間の事だ。一人一人が恥ずかしそうに自分の名前等を発言していく中、

「ローザでええす！」

と言い放ったのがヴィクトル・アズナヴール、この人であった。未知のキャラに純情な少年少女は戸惑い、悲しいかな孤立寸前になってしまったローザに話しかけたのがわたしだったのだ。

実は単に興味があってオカマに触れたかっただけなのだが、ローザ本人はすごく嬉しかったのだという。「マイペースな友人にあたしは救われたのよ」と言われた時はなんだか恥ずかしかった。一人話し掛ければ不思議なもので、ローザはすっかりクラスに馴染んでいた。と思っていたらこの状況というわけか。

薔薇の刺繍の入ったハンカチで涙を拭うローザに、フロロが口を開く。

「別に生まれ持った個性を変えろとは言わないけどさ、自分が『変人』ってことは理解しろよ。これから学園出て、自分達で依頼を取ってくる機会も出てくるんだ。仲間にオカマがいたら変な目で見られるかも、って考えは別の見方したら『プロフェッショナル』なんだよ。俺は嫌いじゃないぜ」

フロロの辛辣な言葉に再びローザの顔が歪んだ、と思ったのだが、ぐっと堪えるようにハンカチを握り締める。

「……分かってるわ。でもね、あたしが腹立つのは、その子にちょっっっとでも『パーティ組まない』なんて話しは出してないことなのよ。勝手に勘違いして、しかも逃げていくって。それって凄い失

礼じゃない！？」
　野太い雄叫びと共に立ち上がるローザにアルフレートが溜息をついた。
「怒りに変わったんならもう大丈夫だな。……めんどくさい奴だ」
　いつの間にかお弁当を食べ始めていたイルヴァが手を止め、アルフレートとローザを見る。
「じゃあ二人ともメンバー組み終わってないんですね？」
　それを聞いてローザが肩を竦めた。
「まだよ。というか話し聞いたの、さっきだもの」
「じゃあこのメンバーで組めばいいじゃないですか。仲良しなんですもん」
　イルヴァの発言にわたし達は顔を見合わせる。フロロがにやっと笑った。
「……結局『いつものメンバー』じゃん。ま、いいんでないの？」
　そう、この五人がいつもお昼やらなんやらでつるんでいるメンバーなのだ。一人一人ちょっと問題はあるが、わたしが一番落ち着く人達でもある。
　済んでみれば当たり前の結果に終わってしまった。問題の解決である。
　そもそもこれだけクラスが均等に分かれているのに、何故かこのメンバーのパーティは思いつかなかったのだから、わたしもちょっと薄情かもしれない。しかし何より自分があぶれなくて良かったな、とほっとした溜息をついた。
　買って来たサンドイッチの包み紙を解いて顔を上げると、上に見える渡り廊下の窓の奥に見える光景が目に留まる。
『彼』だ。後ろ姿なので顔は見えないものの、ずっと見てきた人だ。仕草や雰囲気で間違いないと分かる。その彼の前にいるのは見覚えのある顔なのでプリーストクラスの子だろうか。他にも人影は見えるがよく窺えない。
　メンバー入りの相談かな、と思う。本決まりのメンバーなのか違

うのか、どちらが誘う側なのかは分からないけど、目立つ人だもの。きっと色々なところから打診があるに違いない。

「演習ねえ、面倒だなあ」

アルフレートの声に我に返る。欠伸を一つした後、わたしの視線に気付いたのか、

「何だ」

そう言い放つエルフは人の顔を睨みながら林檎に齧り付いた。

オカマ、嘆く

変り者のエルフが学校に入って来た。

そんな話しを聞いたのは、わたしが三期生に上がった時だった。

人間より遥かに寿命が長く、また魔力や精神力でも人間のそれとは比べものにならない程優れている彼らは、基本的に人間界には立ち入らない。それは立ち入る理由がないからである。

たまに物好きなエルフを町中で見ることはあっても、それは「人間の観察」目的だ。人間より確実に優秀な生き物であるエルフが、間違ってもその人間から物を教わろう、などとは思わないだろう。

ところがどっこい、アルフレート・ロイエンタールはプラティニ学園に入学して来たのだ。

当時、そんな彼を一目見ようと学園中の生徒が彼の元へ詰め掛けた。わたしもその中の一人。精霊使いとして超が付くほど優秀なことと、エルフ特有の線の細い美貌を持つ異種族を、色恋とは別の憧れの目で見たものだ。

しかし、わたしの予想とは少々違う場所に彼はいた。

「バードクラス」

そう、吟遊詩人のノウハウを学ぶクラスにいたのだ。エルフのイメージといえば、いうまでもなく精霊魔法の使い手としての魔術師の姿だ。しかしながら、ああ、魔法はもう習うことなんてないんだろうな、ちょっとした趣味のつもりで音楽でも習うのかもな。あの見た目だもの、さぞかし様になるんだろう。誰もがそんなことを考えていたと思う。今となっては当時の自分に忠告してやりたい。彼の歌を聴くな、と。

若き少年少女に軽くトラウマを与える結果となった歌声と連日割られるガラス窓に、いつしか彼の学園でのあだ名は『歩く鼓膜破壊機器』。学園に入ってくるようなエルフがまともなわけがなかったのだ。

そんな彼とわたしが知り合ったのは、彼の意外な一言だった。
「お前はアルマ・ファウラーの孫か？」
アルフレートはわたしの祖母であるアルマ・ファウラーと知り合いだったのだ。彼曰く、わたしと若かりし頃の祖母はそっくりらしい。わたしが驚きながらも肯定すると、彼は何やら嬉しそうにニヤニヤ笑い、それから何かと話しかけてくるようになった。
しかしその後、アルフレートから祖母の名が出てくることはない。わたしと祖母は離れて暮らしている。その為、アルフレートと祖母のつながりはよくわからないままだ。
もしかして一緒に冒険なんかしてたのかな、とアルフレートの横顔を見ながら思う。わたしの祖母は両親とは違い、魔法使いだったからだ。その才能をこんな形であれ、引き継いだのがわたしになる。
その辺の話しも一度聞いてみたいものだな、と食べ終わったサンドイッチの包みを丸めた。するとそれを見ていたのか、ローザがローブの懐から何かの紙を出す。
「これ、記入して教官のところに持っていきましょう！こんだけ早い結成なんてあたし達が一番かも！」
見るとパーティ編成書の記入用紙だった。メンバーの名前と所属クラス等を書き込む欄がある。日の光を反射する白い用紙に「いよいよだね」と呟いていた。
わたしの魔術書の表紙を下敷きにして全員の名前を書き込む。出来上がったそれをわたしは手に取ると、
「じゃあ教官室行こうか！」
と全員の顔を見た。
昼食の残骸を片付け、鼻歌なんて口ずさんじゃったりしながら教官室に向かう。廊下を歩き、見えてきた茶の重厚な扉の前に立つとノックした。くぐもった「どうぞ」の声に意気揚々と中に入り込む。
机と積みあがった書類で構成された教官室、入り口から一番手前の席にいるメザリオ教官はわたしの顔を見て目を丸くした。しかしぞろぞろと続く仲間の顔を一つ一つ見る毎に、どこか遠い所を見る

ような目つきに変わる。
「……どうした？」
低い教官の呟きに、わたしは記入してきた編成書を差し出す。
「はい！出来ました！普段の仲良しグループですけど、良いですよね？」
明るいわたしの声に、
「ああ、うん……」
呻きのような教官の声。その対比に、漸くわたしは空気がおかしい、と気付いた。顔を上げると室内にいる教官達が全員こちらを見ている。戸惑っているわたしにメザリオ教官は静かに言い放つ。
「却下」
「え、な……なんで？」
突っ返されたメンバー編成書を手にしながら、わたしは辛うじて乾いた声を出す。
「なんでも何も……メンバーが片寄りすぎだろう」
メザリオ教官は溜息をついた。わたし達五人はお互いの顔を見回す。
「でも、人数の問題もクリアしていて、クラスだって一人も被ってませんよ！？」
詰め寄るローザに教官は答えにくそうに口を開く。
「それは認めよう。仲良しグループだって別に構わない。しかしね」
口篭るメザリオ教官の後ろから一人の女性教官が顔を覗かせた。
「言いにくいなら代わりに私から言いましょうか？」
冷たい声と女性教官の光る眼鏡に、わたしは思い切り身を引いてしまった。
「まず、貴方達は一人一人が問題視されている存在だということを理解しなさい」
女性教官――コルネリウス教官は持っていた指示棒をびっ！と伸ばした。五人の背筋が伸びる。
「貴方」

指示棒で差されるのはイルヴァ。人形のような顔を傾げて見せる。
「日ごろから服装について注意を受けているはずです。ファイタークラスの生徒は薄い物でもレザーアーマーか防護服を着用のはず。……なんですか、その格好は」
メザリオ教官を含めてその場にいる全員がイルヴァのフリフリな服を見る。
「ミニスカート、防護服無し、靴もなんですか、その厚底のヒール靴は」
「確かにねえ」
頬に手を当て溜息つくローザに「ハイそれ！」と指示棒が迫った。
ローザは身をのけ反らせる。
「個人の性格についてとやかく言いたくありません。けどね、外部の人間がオカマ言葉全開の生徒を見て、どう判断するかは、我々も関与出来ません。普通ではない、これをまず理解しなさい」
「お、オカマの何が悪いのよ！」
うわーんと泣き出すローザに一気に修羅場感が増す。いかん、ここは地獄だ。
「婚期逃した独身女のヒステリーって嫌だよな」
にやにや笑うフロロの頭に指示棒がぱちん！と当たる。「いてえ！」という悲鳴があがった。
「貴方はそれ！その口の悪さがトラブルの原因になるかもしれない！それを胸に置きなさい！盗賊としての腕前がどうこうなんて関係ありません。この問題児達を引っ張る力は貴方には無いんだから！」
痛そうに頭を摩るフロロに同情するものの、普段からコルネリウス教官の魔術理論の授業はとんでもなく厳しいのだから馬鹿だな、とも思う。
「……そして一番の大きな問題は貴方達」
指示棒が差すのはわたしとアルフレートだった。わたしは棒の先をぎょろぎょろと見つめ、アルフレートは欠伸する。
「貴方達が演習場や校舎の壁、窓ガラスをそれぞれ破壊したその修

繕費、それはどこから出てるか知っていますか？」
　コルネリウス教官の目がすっと細められた。黙っているわたし達に教官は縦にやたら長い一枚の紙を突きつける。ずらずらと並ぶ日付と学園内の施設の名前に嫌な予感がする。これってもしかして、わたしとアルフレートが破壊して、修理が必要になったもののリストなんじゃないだろうか。
「学園の維持費用からです！学園の予算なんです！貴方達が大人しければ魔術書がいくつ増えたでしょう！奨学金枠がいくつ増えたでしょう！……いいですか？貴方達、特にその二人は退学寸前の状況だということを肝に銘じなさい」
　その言葉にぎょっとする。退学になったらどうすればいいんだろう。というかどうすれば回避できるんだろう。大人しくしてれば、って授業の一貫だったんだけどな。……ってそれがマズイのか。
　わたしの動揺を見透かしたようにコルネリウス教官は指示棒を手の上で弾いた。
「今回は見返すチャンスだと思いなさい。学生としては底辺の貴方達が、冒険者としては立派なものだと、周りを見返して御覧なさい。そしてこの学園、貴方達を慈悲で許容してくださっている学園長に恩返しなさい。プラティニ学園の生徒、そしてその出身冒険者は頼れるということを、世間に知らしめるんです！」
「そ、その為には！？」
　熱い演説にわたしは思わず大声で尋ねる。コルネリウス教官は厳しい顔のまま答えた。
「まずはバラバラになる方がいいと思うわよ？メザリオ教官が言いたいのも、よりによって学園の問題児が一同に揃ってることを仰っているんだから」
　一瞬の間の後、全員がメザリオ教官を見る。視線を向けられた教官は額に浮かんだ汗を拭きつつ息をつく。
「……まあまあ、何も全員バラバラになれ、とは言わん。数人ずつ分かれるのでもいい。それか、まだ五人なんだ。最後にもう一人、

そうだな、君らをびしっと導いていけるような生徒を探すんでもいいぞ」

「既に輪が出来あがってるグループに外部からリーダーを引っ張ってこい、って事か？そりゃあ若い身空には酷じゃないかね？」

アルフレートがメザリオ教官の肩に寄りかかる。こんなに自分の立場が分かってないのも羨ましい。再びコルネリウス教官のこめかみに筋が浮かんできたのを見て、わたしは慌ててアルフレートの腕を引っ張った。

「わ、わかりました！出来るだけ早く残りの一人を見つけてきます！そりゃあ教官達もびっくりしちゃうような！」

そう喚きながら仲間の腕を引っ張り、全員を教官室の外へ押し出す。重い空気を遮るように扉を閉めると、その場にへたり込んだ。

「……ど、どうするの？あんなこと言って、リジア、当てでもあるの？」

ローザの小声の質問にわたしはゆっくりと首を振る。

「あるわけないじゃない……」

銀の戦士

「まさか許可貰えないとはね」
既に窓からの光が夕暮れの茜色に染まってしまった中、眉間に深い皺を作り気だるい空気でローザが呟いた。
放課後のカフェテリアには居残った生徒達が何をするわけでもなく、たむろしている。大体は友達と談笑するのに安い学食の飲み物を利用する人々であり、学校の雰囲気を名残惜しむかのようにただ、だらだらと他愛無い話を続ける。
その中で笑顔もなく、たまに口を開けばうなり声をあげているわたし達は周りから見れば異様なのであろう。心なしか距離を置かれている。
「許可貰えないどころじゃないわよ。全否定じゃない」
わたしはいらいらとしながらも、メザリオ教官の出した決断、コルネリウス教官の指摘も間違ってはいないのだ、と苦い思いだった。
校外に出て人に触れる、依頼を受ける、遂行する、それらが始まるということはわたし達はこの学園の『顔』になるわけだ。半端な情で許可を出すわけにもいかないのだろう。
テーブルに工具を広げて何かの金属片をいじっていたフロロが顔を上げる。
「もういいよ。こうなったら勝手に出掛けちまおうぜ」
「勝手に行ってどうするのよ！クエストは教官達が用意してるんだし、単位だって貰えないわよ」
わたしはフロロの適当過ぎる意見を却下する。退学をちらつかされたわたしには常識外をやって教官達を見返す、なんて勇気も持てなかった。
「じゃあ言われた通りにするしかない。一からメンバーを探すか、残りの一人を探すか、だ」
アルフレートが指を二本立てて、ゆっくりと繰り返す。思わぬ駄

目だしに自信を失いかけていたが、考えてみれば演習の話しが出たのは今日のことなのだ。まだ他の生徒はこれからメンバーを探す段階かもしれない。少なくとも教官達が納得するような非の打ち所の無い人格者を探すよりかは、すんなり行きそう。しかしだった。

「……なんか悔しいよね、ばらばらになるのは」

ぽつりと本音を漏らす。同じテーブルを囲む全員が頷きはしないものの、同じ空気になったのを感じた。どことなくしんみりした空気をローザが手を叩いて破る。

「じゃあ、残りの一人を探す方向で考えましょう！」

明るい声に少し気持ちが和らぐ。わたしは大きく頷いた。

「そうなるとファイターだな」

アルフレートがイルヴァを見る。各クラスの生徒が揃ってしまっているわたし達には、複数人いても形になるというとファイタークラスの生徒しかない。元々、推奨されるパーティの形は「前衛と後衛、半々ずつ」というものだった。ぽやっとした顔のままの彼女にわたしも尋ねる。

「イルヴァ、誰か知らない？」

「イルヴァ友達いないんですよねえ」

イルヴァはそう答えると「てへ」と舌を出した。こんなに明るく友達いない宣言をするのも、ある意味相当な強さがないと出来ないのではないか。がっかりしつつも少し感心する。

「安心しろ、私もいない」

自慢げに答えるアルフレート。どうでもいい。

しばらくの間、知っている名前を出し合う。リーダーになってもらうくらいの人だ。わたしのクラスでいうロレンツのような優秀な人。わたし達でも知っているような人、というとやっぱりうちには入ってくれそうにない。極めつけが名前を知っていても友人といえるような人が全員いないことだった。

「……腹減った」

フロロが切なげにぼやいた。わたしも言われてみて空腹に気がつ

く。窓の外を見ると茜色はとうに過ぎ去り、既に暗くなっていた。
「とりあえず今日のところは帰ろうか。もう学園に残ってる人も少ないだろうし」
わたしは半分自分に言い聞かせるように提案する。全員が頷き、立ち上がった。
いつの間にか人気がさっぱり消えていたカフェテリアを出る時、ローザがわたしの肩を叩く。
「大丈夫よ！あたし最近『フロー神』がとても近くに感じるの。きっと何もかもうまくいく前兆だと思うのよね」
フローとはローザの信仰する大地母神だ。豊穣や大地の恵みを司り、結婚や恋愛、命の営みといったものを推奨する『愛の女神』である。世界を創造した六柱の神の一つなので、当然信者も多く、神殿、教会もいたるところにある。
ローザを始め司祭達は皆、神からの助言を貰う『インスピレーション』と呼ばれる力がある他、勘が冴え渡るというような現象もあるそうだ。いずれも自分のさじ加減でどうにかなる問題ではなく、全て神の気まぐれらしい。
「近くにいるって、神様ってそんなに暇なの？」
思わず出た正直な感想にローザは顔をしかめる。だってこの世界にどれだけのフロー神信者がいるのか知らないけど、一人に付きっ切りになってくれる神様なんて相当暇なんじゃないだろうか。

学園のグラウンドで皆と別れた後、わたしは裏門のすぐそば、通学用のバス停のベンチに腰掛ける。魔法の『ライト』がいたるところで光る学園は綺麗だ。それを眺めながら肩に掛けていた重いカバンを横に置いて肩を回した。
ソーサラークラスの生徒のカバンは重い。魔術書に限らず他の教科のテキストもいっぱい持ち歩いているからだ。魔術師というのはパーティ内の役割において知識人として振舞うことも求められる。

魔術師というのが本来「世界を解明する人」という職業だったからしい。わたしも日夜、泣きそうになりながら外国語や数式を解いているのだ。

今日は授業数も少なかったのに……しかも内一コマはサボったというのに、やけに疲れたなあ、と思う。気疲れ、なんていうと生意気かもしれないが、そんなものかもしれない。

時間が時間なのでバスを待つ人も自分以外いない。そんな開放感から足を伸ばしていると、裏門からきい、という音がした。見ると緑色のローブにそろいのハットを被ったメザリオ教官が、重そうなカバンを抱えて出てきたところだった。

「お、こんな遅い時間まで残ってたのか。で、どうした？」

問いかけに躊躇しながらも残りのメンバーを探すことを伝える。

「そうか」

教官は厳しい顔に見えるが、どこかほっとしたようにも見える。わたしは思わず、

「すいません」

と謝っていた。それを聞いた教官はベンチのわたしの隣りに腰掛ける。「よっこらせ」という掛け声に少し笑いそうになった。

「……実はな、私はこんな職に勤めているが所謂冒険者、という職の経験はない」

驚いて教官の顔を見てしまったが、考えてみればそうかもしれない。前にちらりと聞いた話ではメザリオ教官はずっと学問をやってきて、就職先としてこの学園に来たのだから。

「だから、正しいパーティの形なんて分からない。これが本音だ。でも少しでも違う、と思えば私は生徒にブレーキを掛ける。これが私の仕事だからだ」

教官の言葉が胸にじんわりとした痛みを残す。悲しいのかもしれない。嬉しいのかもしれない。教官が黙っているのを確認すると、わたしはぽつりぽつりと不安を打ち明けていった。

正直コルネリウス教官から退学という言葉を言われるまでは、わ

たしは軽く見ていた気がする事。自分の出来損ないを軽く考えていたわけじゃないけど、「わたしだって頑張ってるじゃん」で認めてもらおうとしていたのかもしれない、という事。

自分が思っていた以上に教官達はわたしを問題視していた事がショックだった。でも考えてみればオカマだってコスプレだって人様に迷惑はかけてないもの。暴走魔法の使い手があのパーティ編成で一番のネックかも、なんて気付いてしまったのだ。

そんな事を教官に伝える。するとメザリオ教官は何度も頷いてみせ、

「頑張りなさい」

そう一言呟いた。慰めの言葉や叱咤激励が無いのが教官らしい。それにこの一言で「頑張っていいんだな」という気持ちになっていた。

わたしがお礼を伝えようとした時、再び門の動く音がした。出てきた人物はわたしと教官を見て戸惑った顔をした後、頭を軽く下げる。わたしはといえば跳ね上がる心臓と一緒に体まで持ち上がりそうになった。

腰元に携えた長いソードに灰色のジャケット、黒いブーツの人物に教官が声を高くする。

「おお、ヘクター・ブラックモア。君も今帰りか」

「はい」

そう答える彼の銀の髪も青みがかったグレーの瞳も、夜を照らす光源によって今は不思議な色合いに見えた。

教官と何か話しているが動揺で全く頭に入ってこない。ただファイタークラスの生徒であるはずの彼の名前を、メザリオ教官がさらりと口に出したということは、それだけ教官達の間で期待されているのだろうな、と思う。

「送っていってやってくれないか?」

そんな言葉と共に、教官がわたしを指差しているのに気がついた。

一気に意識が覚醒する。

「いや!結構です!大丈夫!」

わたしは真っ赤になった顔を隠すように手を振り続けた。教官が「何いってる」と少し怒ったような声を出す。
「だったらこんな時間まで居残っちゃいかん。今日のところは送ってもらいなさい。……悪いね？」
そう言って教官は隣りの彼に尋ねる。
「いえ、大丈夫です。送っていきます」
教官に答えながらヘクター・ブラックモアはわたしを見て、少し照れくさそうに微笑んだ。
ちょうどその時、道の向こうから乗り合いバスを引っ張るコルバインの足音が聞こえ出した。地鳴りのような響きをさせて、巨大な馬のようなコルバインはバス停前に止まる。
「……家、どの辺？」
「え！？」
ヘクターの質問に季節はずれの汗が吹き出る。後ろから教官がじっと見ていた。な、なんで嘘つくなよ、って空気なのかしら。
悪いので適当に近い所を言おう、と思っていたが教官の影が動かない。わたしは正直に家のすぐ近くの通りの名前を伝えた。

嫌味なメガネ

わたしは不器用な人間なのだろう。

三期生に上がる日、年度初めの学園に登校するバスの中で初めて彼を見かけた。驚くほど綺麗な顔の少年に、わたしは初めて人の顔をじっと見るのが恥ずかしいと感じた。目が合うかもしれない、と考えただけでもう一度彼の方を振り向き見ることが出来なくなってしまった。

二週間後、クラスメイトの噂好きが話しかけてきた。

「ねえ、今年からファイタークラスに入ってきた人で、びっくりするくらいかっこいい人がいるの知ってた？」

とっくに知っていた。なぜならわたしが会った日が、彼の初めての登校日だったのだから。

話しをしてきたクラスメイトは一期生の時も同じクラスで、初年度の恒例行事『懇談合宿』の時も一晩中、恋愛話をしているような子だった。好きな人を聞かれたわたしは「全員好きな人がいる」という事実に面食らっているような遅れた状態で、無理やり近所の生まれたばかりの男の子の名前を出すような有様だった。十二になったばかりの歳の苦い思い出だ。

転入生の話題に盛り上がるクラスメイトに、曖昧にしか返事が出来ないわたしだったが、一つ誇らしいことがあった。住宅地と少しずれた場所に家があったわたしは、通学路が同じになる同級生がいなかったのだが、噂の彼とはよく行き帰りが同じになった。同じバスを使っている、というだけで優越感に浸れたのだ。

「ヘクターって剣の腕前も凄いんだって！」

一月後、クラスメイトの噂話で初めて彼の名前を知ったわたしは、早くも優越感が崩れ去った。この頃になると何かしら理由をつけてファイタークラスの校舎に入り込むクラスメイトが沢山出てきた。わたしはそれを羨ましく見ながらも、興味が無い振りをした。「話

し方が優しい」「目が綺麗」など騒ぐ声の中、「でもちょっと近づきがたいよね」という意見にほっとしたわたしは、きっと褒められた性格ではないだろう。

魔術師科二クラスとファイタークラスには見えない壁があった。前者には女の子が多く、後者は男の子ばかりだからだ。それに目指すものが１８０度違うというのは共通の会話が生まれない。でもきっと彼がソーサラーを目指す人物だとしても、わたしはずっと話しかけられないままだったに違いない。現に噂話の輪にも入れず、彼と仲良くなった女の子がいないかどうかに耳を澄まし、いないと分かるとほっとしているような嫌な子だった。

二月後、わたしも初めて彼の声を聞いた。帰りのバスの中、彼が席を譲ったおばあさんは大きな荷物を抱えていた。

「どこまでですか？」

「悪いわ、そんな」

「いいんです、ちょうど俺も降りる所だから」

そう言っておばあさんの荷物を持ち、足取りのゆっくりなおばあさんと共に彼が降りて行ったのは、いつも降りるバス停の二つ前だった。帰ってから練習した「昨日見てました。偉いですね」という台詞が使われることはなかった。

背の高い彼は学園のどこにいても目立ち、常に遠巻きに見ている女の子がいた。それを更に遠巻きに見ているわたしに、彼に近づく機会など一生無いんだろうな、と思い始めていた。

人生何があるか分からないものだ。たった十五のわたしにそれを教えてくれたヘクターが、今隣りに座っている。緊張から話し掛けることはおろか、頭の天辺から指の先まで動かすことが出来ない。そのわたしの空気が伝わっているんだろう。彼の方も居心地悪そうに顔を触ったりしているのが、気配で分かる。

「やだお母さん、荷物忘れてるよ？」

そんな声と人の降りるばたばたとした雰囲気に顔を上げると、普段へクターが降りている停留所なのに気がついた。
「あ！ちょっと、こ……」
ここで降りなくていいの？と聞こうとするが、慌てて抑える。これじゃまるでいつも見ているのを教えるようなものだ。そして今の動きで初めて間近で顔を合わせてしまった。そのまま再び固まってしまう。
「あ、俺の降りる所は気にしないでいいよ」
そう微笑む顔に頭がくらくらする。なんでこんなにいい人なんだろう。せめて黙ったままなのは何とかしたい、と回らない頭から無理やり会話を引き出す。
「い、いつもはこんな遅いわけじゃないの。今日はたまたまで、何か色んなことがあった日だったから」
自分でも何言ってるのか分からない。漸く出てきた台詞が意味の無い自分語りとは。カバンの持ち手をぎゅうぎゅうと握りしめた。
「うん、知ってる」
「え？あ、そうかあ、はは」
汗をかきながらへクターの答えに頷くが、少し首を捻る。何を知ってると言ったんだろう。もしかして『色んなことがあった』に対して言ってるんだろうか。もしや今日の演習場の騒ぎの事を……、と流す汗が冷や汗に変わった。
横目に見えた窓の外の景色に再びはっとする。自分の降りる停留所だ。
「あ！降ります！降りまーす！」
わたしは立ち上がり、いつもには無い大声を上げながら手を上げる。前に座るおねえさんにくすりと笑われてしまった。
「家、どっち？」
バスを降りるとすぐに聞かれる。ここまで来るとやたら遠慮する方が『嫌がってる』と取られるかもしれない。わたしは真っ直ぐ自宅の方向を指差した。

窓からの光に加え、役所の人が毎夕、街灯に施す魔法の光が足元を照らす。でもきっと変な歩き方になっているはずだ。学園の入学式、家に帰ると母親に「アンタ、足と腕が左右同じの出してたよ」と言われたことを今思い出してしまう。

停留所から家が近いことを今日より残念に思ったことはないだろう。何か会話を！と焦る内に家の前の通りまで来てしまった。

「あの、家そこです。すぐそこ」

「あ、近いんだね」

せめて最後くらいは会話を続けさせたい。しかし『ええ、近いしか取り得が無いんです』『近いだけで狭い家なんです』など、自分でも無いな、と思う台詞しか浮かんでくれない。せめてお礼だけは言い忘れないようにするぞ、と拳を握る。

「毎日長い距離帰ってるんだとしたら大変だな、って思ってたんだ。いつもカバンが重そうだったから」

「ありがとう……え？」

噛み合わない会話に思考が止まる。何の話をしたんだろう、とぼんやりしていると、ヘクターは軽く手を上げた。

「じゃあ、また明日」

言い終わるなり去って行ってしまう彼の影を見ながら、わたしはまだぼんやりとしていた。

翌日、わたしは頬杖つき教室の窓から見える景色を眺めていた。自習時間なので咎める人もいない。午前中の陽射し強い景色にひたすら酔いしれる。

なんて美しい学校なのだろう。白い校舎は光を反射し、輝いて見える。学園長の趣味で植物が多いのも良い。グラウンドには今日も鍛練を続ける戦士達の姿。

「素晴らしき我が学び舎よ……」

「何言ってんだよ、気持ち悪い」

その声に振り返ると、眉を吊り上げたロレンツが立っていた。
「何？」
「あのなあ、レポート出してないのお前だけなんだよ。折角の自習なんだから今終わらせてくれ」
溜息交じりの呆れた声に彼の手元を見ると、他の生徒が提出したらしきレポートが束になって積み上がっていた。わたしは慌ててカバンを探る。それを見ながらロレンツの御小言が続いた。
「こういう学科で頑張んないでどうすんだよ……。聞いたぞ、お前退学ちらつかされたんだって？」
ぴたりと手が止まる。なんで同級生からの言葉がこんなにも上から目線なのか、とロレンツを睨むが、それも直ぐに止める。
「……いいわ、許す許す。今日のわたしは機嫌が良いから！」
ぐふふ、と笑うわたしに「はあ？」とロレンツは顔をしかめた。
昨日のヘクターの言葉を思い出す。
『毎日長い距離帰ってるんだとしたら大変だな、って思ってたんだ。いつもカバンが重そうだったから』
そう言ったのだ。それは彼の方もわたしの存在を知っていたということに他ならない。今日の朝は同じバスにならなかったようだが、それでもわたしは見るもの全てが輝いているような気分だった。
「あー、やっぱこれからは会ったら挨拶しなきゃだよね！緊張するなあ。でもそっからお話し出来るようになるかもしれないんだし、今が頑張り時だ！」
浮かれるばかりに言葉をそのまま口に出していると、
「うん、レポート頑張れ」
ロレンツが水を差す。わたしは舌打ちするとカバンからレポートを引っ張り出した。
「じゃーん！『ワイツ王国とレエ男爵についての考察』。完璧よ」
受け取ったロレンツはぱらぱらとめくり、感嘆の声を上げる。
「おお！さすが！オカルトな歴史になると違うな！」
レポートの主題となったレエ男爵は「夜な夜なあんなことやこん

なことやって変態ぶりを発揮しただけで無く、本気で金を作るべく錬金術にはまって怪しい儀式で悪魔を呼び出し、その悪魔に食われちゃった」人物である。わたしの得意な分野だ。

そう胸を張るも、ふと思い立つ。

「……話し掛けるにしても、こういう話題じゃ駄目よね。普通の男の子ってどんな話しが好きなんだろう」

「デーモンの出てこない話しだろうな。……そんな事より、お前達大丈夫なのかよ」

小声になるロレンツに首を傾げるが、言葉の意味を飲み込む。わたしの退学の噂を知っているくらいだ。パーティメンバーの話しだろう。

「う、うるさいわね。そういう自分は……と、そっか……」

わたしは抗議の声を途中で詰まらせる。彼、ロレンツは「研究科」に行く事が決まっている。研究科とは魔術師クラスにだけある制度で、通常の生徒のようにクエストで単位を取るのではなく、魔導の研究にのみ専念出来るクラスだ。そこの現研究員たちからのスカウトを受けたことは大変な名誉であり、ロレンツ自身も冒険活劇をするより研究に没頭する方が魅力的らしく、早々と進路が決まっているのである。

「来週まで時間があるっていっても、時間が経てば経つほど人材は減っていくんだぞ」

「……うん」

まとも過ぎるロレンツの指摘にわたしは気持ちが萎えていき、うなだれるしかなかった。

リーダー狩り

「がり勉男の言う事も一理あるわね」
ローザがお弁当のタコさんウインナーを刺したフォークを握りしめ、唸った。
「いや、一理どころか真理だろ」
フロロがチキンサンドにかぶりつきながら答える。わたしが話したロレンツの台詞の内容に全員が考え込んだ。
わたし達のパーティが教官達に認められるには、追加メンバーは誰もが認める優秀な生徒でなければならない。そして優秀な生徒程、パーティ組みには苦労しないはずなので次々に『売れて』いくのだ。時間が経つほど状況は悪くなる。
「イルヴァにお友達がいれば良かったんですけど。コスプレ仲間ならいるんですけどねえ」
イルヴァが残念そうに呟いた。本日の衣装はヒョウ柄のビキニに角の付いたカチューシャを頭につけている。この格好で授業受けてるんだろうか……。暴れまわった時に目のやり場に困る姿だ。
「いや、イルヴァが増えても困るだけだから」
わたしが手を振るとイルヴァは首を傾げる。その仕草を見て思う。わたしもピンチではあるけど、この娘も皆バラバラになった際に新しい仲間の元で上手くやっていけるんだろうか。
わたしは考えなど浮かんでくれない頭で空を見上げる。四階の渡り廊下、最上階にあるここは屋根がなく、スペースも広めで日当たりがいいので、シートを敷いてランチを取る生徒も多い。今日はわたし達四人の他は二組程、輪を作って食事を取っている。
「悠長にしていられないのであれば、それなりの方法を考えるしかない」
後ろからした声に振り向くと、りんごを齧るアルフレートの姿。彼はわたしの隣に座ると、わたしのお弁当箱の蓋にりんごの芯を捨

てた。
「どんな方法よ？」
わたしは聞きながら、芯をアルフレートの膝に突き返す。
「頭を働かせる前に聞き返すのは馬鹿のやることだぞ」
アルフレートは鼻で笑いながら、返されたりんごの芯をイルヴァのお弁当箱に投げる。それをイルヴァは見事な反射で弾き飛ばした。
「何それ？自分だって考えなんて無いくせに」
わたしが性格の悪いエルフを睨む横で、空から舞い戻ったりんごの芯がローザのお弁当に、ぽとり、と落ちる。ローザがわなわなと震えだした。
「きゃー！！もう食べられないじゃない！」
「私は病原菌か！！」
騒ぐオカマとエルフの横でフロロが「うるせえなあ」と耳を押さえる。のん気だな、と溜息つかずにはいられない。
「……考えなら一個あるわよ」
わたしの言葉に全員が振り返る。立ち上がり腰に手を当てるわたしを見るメンバーの顔には期待の色はない。内心むっとしつつ口を開いた。
「聞き込みよ、地道な聞き込み。確かな達成を得るには地道な努力が必要なのです」
胸を張るわたしにローザは「あら、あたしの得意分野だわ」と手を叩き、アルフレートとフロロの妖精二人は露骨に嫌な顔をした。

「やだあ、緊張しちゃう！」
ファイタークラスの校舎、重そうな両面開きの扉の前でローザが首を振る。
「いや、顔嬉しそうだし」
眉を下げつつも口元が緩んでいるローザにわたしは突っ込む。そう言っている間にもローザの目は通り過ぎる男子達へと泳いでいる。

獲物を探すハンターに見えるのはわたしだけか。
『地道な』と言った途端にふらりと消えた妖精二人のことは諦めて、わたしとローザは正面口から、イルヴァは裏口から校舎を回り聞き込みをしていくことにする。休み時間ということもあるが、やはり同じようにメンバー集めに苦労している同族の姿もちらほらあった。その中の一つに目が留まる。
「あら、リジアのお仲間」
ローザの言うとおり、入り口付近の廊下で身を縮めている二人組みは真っ黒のローブ姿。やっぱりこういう場だと黒ずくめの方が浮いてるじゃない、と妙に誇らしい気分になった。向こうもこちらに気付いたらしく「あ」と声を上げた。一瞬、気まずそうに目を伏せていたが、その後は何故か睨んでくる。
二人の顔に見覚えのあったわたしは好戦的に睨み返す。なぜならわたしを『敬遠されそうな問題児』と笑った二人だったからだ。
お仲間には徹底的に強気な内弁慶のソーサラー達が睨み合う様を、
「やだあ、おもしろーい」
とローザは眺めているという変な状況が暫く続く。が、虚しくなったのか一人がわたしに尋ねてきた。
「……仲間、揃った？」
「いや、だからこんな所に来てるんじゃない」
わたしの答えに黄緑色の不思議な色合いの髪をした少女は少しほっとしたように息をついた。もう一人のオレンジヘアーも寄ってくる。黄緑色がディーナ、オレンジがジリヤである。
「私達もまだ揃ってなくて。ここにいれば声掛けがあるかな、って思ったんだけど、もうやだ……。知らない人と話すくらいなら学校辞めたい」
ディーナの半泣きの台詞に、横目に見えるローザの表情が呆れの極みになるのが窺えた。わたし自身はここまでではないものの、これが『ソーサラークラス』なのである。

「まだパーティ組んでない奴ねぇ」
ディーナ&ジリヤと分かれ、話し掛けることに成功した一人目の人物、赤毛のクリスピアンくんは答えながら顎を摩った。
わたしは元々彼の事を知っていた。交友範囲が広いのか魔術師クラスの校舎でもたびたび見かけるからだ。整った顔に明るく派手な雰囲気。腕も立つなかなか周りからの評価が高い人物である、らしい。なんせ腕前に関しては噂で聞いた話しでしか分からないからだ。授業風景はよく覗いているものの、魔術師であるわたしには腕の差なんてよく分からないというのが本音だ。重い武器を振り回しているだけで充分凄いと思うし。
さて、目の前のクリスピアン君、目立つ存在なゆえ友達も多いようなタイプだ。わたしも数回程話したことがあり、それだけで彼の気さくさが分かる。彼を見つけてとりあえず聞き込み開始。別に彼がパーティに入ってくれなくとも情報が聞ければ十分なのだ。すなわち、彼の友達ならそれなりの人が多いはず。いやらしい考えだが人間、自然と同じようなタイプが集まるものなのだ。
「意外と多いぜ。俺の周りじゃ」
返ってきた答えはまさに意外なものだった。
「え?そうなの?」
わたしが驚いていると彼は頷き、腕を組んだ。
「結構選り好みしてるやつが多いからなぁ。俺の友達なんかでも、何組も断ってたぜ。なんでも『入れてもらおうと思ってるところがあるから』とかなんとか」
わたしとローザは顔を見合わせる。うーん、うらやましい話である。こういう話しを聞いてしまうと嫌でも格差を感じてしまうじゃないか。
そんなわたし達の空気を読んだのか、クリスピアンは苦笑しつつ首を振る。
「あ、そういう贅沢な状況の奴ばっかりじゃないよ?単純に仲間が

揃わない奴もいっぱいいるしな。ファイタークラスだと魔術師クラスの知り合いがいない奴って多いからさ。ほら、建物も違うし」
「なるほど……。けっこう同じ悩みの人もいるかもね、わたし達と」
「そういうこと。だから良い方だよ、メンバー5人まで決まってるんでしょ？」
良い方、なのかは置いておき、クリスピアンの笑顔にわたし達が頷いた時だった。いきなりぶわっ！と黒い影がわたし達三人に覆いかぶさる。
「え？」
わたしは頭上を見上げた。視界に飛び込んできたのは素早く動く二つの影。次の瞬間、
「うおわ！！」
クリスピアンの絶叫が廊下に響き渡った。足下の光景に唖然とした後、立ちくらみがする。
「何してんのよぉおおお！！」
ローザの絶叫する声。目の前には巨大な虫網のようなものを地面に振り下ろしてがっちり押さえこんでいるアルフレートとフロロの姿。網の中ではクリスピアンがもがいている。
「な、なんなんだ！？」
「ふふふ……、我々は君を拉致しに来たのだよ。おとなしく我々のパーティに入るんだ」
恐ろしいことを言いつつクリスピアンに近づくアルフレート。
「何言ってんのよ！無理矢理すぎるでしょ！つーかなんでフロロまで手伝ってんのよ！」
「楽しそうだから」
さらりとわたしに答えるフロロ。こ、こいつ。ある意味アルフレートより性質が悪い。
「お前達もよくやったぞ。よくこの男の気を削いだ」
「共犯にするな！さりげなく！」
アルフレートの頭をはたくわたし。クリスピアンは呆気に取られ

ていたが、ようやくもぞもぞと網からはい出してきた。
「ご、ごめん。俺はもう無理だよ。決まってるんだ。メンバーが」
律儀に答えてくれるクリスピアン。いい人だ……。
「ちっ、なら貴様にもう用はない。行くぞ！フロロ！」
悪役でしかない台詞を吐きつつアルフレートは網を掴むとフロロを手招きする。割とあっさり退くのを見ると完全に遊び目的なのが伺える。
「ちょっと！待ちなさい！」
ローザが叫ぶもむなしく、次の瞬間には二人は消えていた。くそー、さすが妖精コンビ。足が早い！むなしい風が吹くのみの廊下に佇む。
「君達も大変だね。まあ楽しい仲間とも言えるじゃない」
クリスピアンの軽いの声にローザが返す。
「じゃあ交換してよ。今ならコスプレ女も付けるわよ」
「……仲間なんじゃないの？」
この質問にはわたしが答える。
「仲間だけど深い友情で結ばれてるわけじゃないのよ」
隣りでローザも頷いている。すると、表から戸惑いと驚きを混ぜたような悲鳴が聞こえてきた。
「も、もしかしてあの二人じゃないの！？」
ローザの声にわたしはクリスピアンへの挨拶もそこそこに駆け出す。後ろから必死の形相でついて来るローザがわたしに叫んだ。
「あの馬鹿共！今、騒ぎ起こしてどうするのよ！始めは大人しく良い顔しとけば捕まえることも出来るかもしれないのに！いいリジア、これは男を捕まえる時の常識よ！」
実行したことがあるのだろうか、というどうでもいい疑問が湧いてきてしまう。が、頭を振ることでそれを消し去った。
「解散も考えた方がいいな、こりゃ」
そう呟く。組むのも早ければ散るのも早い。共に学園記録なのではないか。脇に避けていく生徒達を見ながら、そんなことを考えて

しまった。

異議あり！

表に飛び出したわたしの目に入ってきた光景は、半ば予想していたとはいえ現実逃避したくなるものだった。グラウンドへの通路に尻餅ついている黒髪の少年とその彼に掛かる網、そして見慣れた異種族の二人の姿。

「やめなさいって言ってるでしょうが！」

ローザが走りながら叫び、網を押さえていたアルフレートを蹴飛ばす。わたしはその間にフロロの首根っこを捕まえると持ち上げる。

「ニャーン」などと憎たらしい声が上がった。

「ごめんなさいねえ、大丈夫？」

甘い声を出しつつローザは網に掛かった少年を立ち上がらせる。呆気に取られていただけのようで相手も時間を置くと笑顔を見せてくれた。

「ああ、大丈夫。いや、びっくりしたけどさ」

苦笑しながらの答えに頷いていると、アルフレートがわたしの肩に腕を乗せ寄りかかってきた。

「どうだね、我々のこの作戦は。捕獲と同時に混乱させ、相手に正しい判断が出来ないようにするんだ」

「やってる事、丸っきり悪人じゃない！わたしは正常な状態でも自分達を選んでくれる人が良いのよ！」

わたしの真っ当な叫びにアルフレートは眉間に皺寄せた。

「お前、正常な人間が自分達を選ぶとでも思ってるのか？凄まじく歪んだ自信だな」

「ははは」

アルフレートの言葉を受け、何が可笑しいのか笑う少年に、

「何が可笑しいのよ」

わたしの思い切り睨みつけた顔を向けると「すいません……」と小さくなる。

「いずれ私の考えが正しいことも証明されよう。行くぞ、フロロ！」
網を抱え込みアルフレートは再び走り去る。その後ろ姿にわたしは怒鳴った。
「ばかー！コルネリウス教官に見つかったら今度こそ退学よ！」

あれから何人の生徒を悪の手先――もといアルフレートとフロロの手から逃がしただろうか。これだから嫌われるんだよ、と今更思う。
「ったく、何てことしてくれんのよ、あの馬鹿ども！」
ローザが怒りの声をあげる。その顔に浮かぶのは疲労と焦り。わたしだって同じような顔をしているのだろう。
「あの二人だけ楽しんでるのは納得いかないですねえ。イルヴァも早く呼んでくれればよかったのに」
「お願いだから止めてね！？あの二人を押さえつけるだけにしてよ！？」
応援に呼んだイルヴァにわたしは突っ込みつつ、辺りを見回す。とりあえず全体を見回そう、とグラウンドの真ん中まで出てきたは良いが、二人があまりにも神出鬼没なことに、わたしもローザも疲れてきた。こんな事をしている場合じゃないというのに、目的が馬鹿二人を探すことに変わっている。
「もう！休み時間も終っちゃうわよ！あたし次のコマは授業出なきゃいけないのに……」
「ローザちゃん！あっち！」
わたしはローザの袖を引っ張りつつ、ある方向を指差す。グラウンドの隅にある第二演習場の屋根の上、こそこそと歩く怪しい影二つ！なぜか上空から網を振り下ろすことに美学を見いだしているようである。
「あそこね！」
ローザが駆け出す。イルヴァと一緒に後を追いつつ、わたしは下

にいるのであろうターゲットに目を移す。
その瞬間、息が止まった。周りの音が止む程の最悪な事態がわたしを襲う。昨日、一瞬天に昇ったわたしを神は突き落としてくれた。遠い距離からでもはっきり分かる。演習場の前を歩いていたのはヘクター・ブラックモア。彼に他ならなかった。
このままではわたし達のお馬鹿コントを彼の前で披露することになるのは確実だ。それだけは絶対に避けなければならない。わたしが貧血を起こすんじゃないか、という程顔を青くしているのも知らずにアルフレートとフロロは下に見えるヘクターを指差し、確認している。わたしは走る速度を限界まで上げローザを追い越した。アルフレートが網を振りかぶり、屋根を蹴る！
「やめてぇえええ！！」
絶叫と共に突っ込むと、ヘクターを突き飛ば……そうとしたが、届かない。空を切る自分の手と彼の驚いた顔が見えた。次の瞬間、ごりっ！！
頭の上から網の洲であろう、棒状のもので叩き付けられた。あまりにも痛い衝撃が走ると目から星が飛ぶ、って本当だったんだな、などとちかちかする視界に思った。「あ、やべ」というフロロの声が聞こえる。
「い、いったぁー……」
頭を摩りつつ、起き上がる。頭が凹んでるんじゃないか、と一瞬思ってしまったが既にコブが出来始めていた。
「だ、大丈夫？すごい音したわよ？」
ローザが頭をさすってくれた。涙目になりつつも目の前を見ると、唖然とした顔のヘクターが座り込んでいた。見開かれている綺麗な瞳と目が合う。きちんと網に包まれている状態を見て再び顔が青ざめるが、恥ずかしさから一気に血が上るのが分かった。
「ち、ちょっとぉ！何してんのよ！」
そう叫ぶわたしはひどい顔をしているに違いない。
「い、いや、今のはさすがに済まないと思った」

アルフレートはわたしの言葉にそう答えつつ、しっかり網の柄は放さない。
「そうじゃなくて！この状況よ！」
わたしがびしっと網を指差すとアルフレートははっとする。
「あ、そうだった。……ふふふ、我々はお前を拉致しに来たのだ」
そっからやるのかよ。
「そうじゃないでしょ！」
「どうだ、大人しく我々の仲間にならないか？」
わたしの言葉を無視してアルフレートは続けた。心なしか台詞は棒読みである。さすがに動揺しているようだ。次の瞬間、わたしは一生で一番耳を疑う台詞を聞くことになる。
「いいよ」
……うん？短いが理解出来ない彼の返答にわたしを含め、ヘクター以外の全員が固まってしまっている。ヘクターはゆっくりと網をどけると立ち上がった。何故かこの状況の中で笑顔である。
「いいよ。君らのパーティに入れてくれ」
それでも尚、痛い程の沈黙が広がる。
「……あれ？だめだった？」
ヘクターの言葉に、全員がブンブンと首を振った。わたしは頭の痛みも忘れ、この展開にただただ唖然とするばかりだった。

「もの好きな方だったんですねぇ、ヘクターさん」
放課後のカフェテリア。昨日より一名増えたメンバーでテーブルを囲む。そんな中、大変自覚ある台詞を言うイルヴァ。同じファイタークラスでも違うクラスらしいが、イルヴァもヘクターを知っていた。イルヴァが他人を認識することのハードルの高さを知っているわたしは驚いてしまった。
「ほんとよねぇ。あんたぐらいだったら他にあったんじゃないの？誘いがさぁ」

ローザも腕を組みつつ頷く。
「いやあ、見る目があるんだよ、彼には」
上機嫌なのはアルフレート。まあ、彼のお陰、とも言えなくはない。絶対に感謝したりはしないけど。
ヘクターはというと、にこにことみんなの話を聞き、口を開いた。
「いや、こんな魅力的なパーティはないと思うよ」
こんな台詞でもおべっかに聞こえないのが彼のすごい所。それを聞き、五人の顔が緩む。
『そ、そうかなぁー』
ヘクター以外の全員の声が重なった。それを見てまたにこにことする彼は、わたし達の救世主となるはずだ。なぜなら「ファイタークラスであり」「学年で誰もが知るような存在であり」「まともな人」という条件全てをクリアしているのだから。
わたしはというと皆と一緒に同調したり、盛り上がったりはしているものの、まだ彼と目を合わせられない状態だったりする。現状に心が追い付いていけていないのだ。
「じゃあ早速だけど、これに名前書いてくれない？」
悪徳詐欺師のような台詞と共に、ローザが昨日と同じように懐からメンバー編成書を取り出す。受け取ったヘクターがペンを紙に近づけた時だった。
「ちょっと待った」
響いた声にヘクターが手を止め、見守っていたわたし達は顔を見合わせる。誰の声？と一人一人を見ていると、ローザがわたしの背後へ目を動かし「あ」と呟いた。
わたしが振り返るとそこにいたのは何人もの生徒の姿。何故か全員がこちらを睨んでいる。
「俺達も彼を誘ってたんだ。その話し合い、参加させてくれ」
先頭にいる盗賊のような雰囲気の彼が、わたしを睨みながら言い放った。それを皮切りに後ろに立つ生徒からも声が上がる。
「うちだって誘ってたんだぞ！参加させろ！」

「わ、私達なんて今年度始まってからずっと誘ってたのよ！？」
「それ言うなら、あたしなんて去年からアプローチかけてたわよ！」
「何それ！キモいのよ、ストーカー女！」
派生した発言から喧嘩まで始まってしまい、声は鳴り止まなくなる。酷い混乱にわたしとローザは目を合わせた。すると横から「ポロン」と澄んだ音が聞こえる。
一瞬で静まり返るカフェテリア内、全員の視線を集めるのはテーブルに座り込んだアルフレートだった。膝に置いた銀のハープを弾く度に美しい音色が響く。
「ぴーちくぱーちくうるさい奴らだな。理論的に話せないなら帰れ。さもないと……」
「さもないと？」
シーフの少年はアルフレートの手元を見ながら喉を鳴らす。アルフレートはにやりと笑った。
「歌うぞ」
ざざざ！と波が引くように集団は離れていく。同時に逃げようとしたわたしだったが、後ろからローザに腕を取られてつんのめる。暫く楽しそうに弦を弾いていたアルフレートだったが「さて」と言うと、ハープをテーブルに置いた。
「冷静に話せるなら聞いてやってもいい。だが一つ言っておくと彼、ヘクター・ブラックモアが選んだのは我々のパーティへの加入だ」
「そ、それがまずおかしいんじゃない！」
叫んだのは黒いローブを頭からすっぽり被った少女。クラスメイトのポリーナじゃないか。よく他クラスの噂話しを持ち込んではおしゃべりに花を咲かせるような子なので、わたしはあまり仲良くしたことがなかった。理由はわたし自身が何言われてるか分かったもんじゃないからだ。
「あんた達、自分の評価を分かってないのよ！オカマだ、音痴だ、規則も守れない奴ばっかりで、彼は未来あるエリートなのよ！？」
悲鳴のような叫びにシーフの少年が続く。

「そ、そうだ！絶対おかしい！何か脅迫して加入させようとしてるんだろう！？」

ヘクターが困ったように手を振り、それを遮った。

「いや、それは無いよ。そんな事されたなら余計に入らない」

その言葉に感動するわたし。ポリーナは「う」と詰まったが、こちらをびしりと指差してくる。

「じゃ、じゃあヘクターはこいつらがどんな問題児か知らないのよ。ずっと同じクラスだったもんだから散々迷惑掛けられたのよ、その魔術師には！」

わたしは思わず指差された方へ振り返る。すると後頭部に「お前だ！」という罵声が降ってきた。

再び騒ぐ声は止まなくなってしまう。

「ど、どうすればいいのよ」

というローザの涙声を聞いて、わたしは頭に血が上るのを感じた。すると次の瞬間、ぱーん！という乾いた音が連続で聞こえ出す。すっと静かになる集団にアルフレートを見るが、彼は腕を組んで座り込んだままだった。

「こらこら、何の騒ぎだ、これは？」

厳しい顔で手を叩きつつ入ってきたのは、学年主任であるメザリオ教官だった。

「何だかよく分からんが、よく分かった」
メザリオ教官はそう言って大きく息を吐いた。
「分からないならもう一度お話ししましょうか！？」
わたし達の話しを聞き終え、難しい顔をしている教官にポリーナが黒いローブを激しく揺らしながら詰め寄る。が、教官は手を振り「座りなさい」と場にいる全員に伝える。渋々、という様子で皆が空いた席に着いた。
「正直に言って今、私はがっかりしている」
メザリオ教官が良く通る声で言った第一声にカフェテリア内は静まり返る。ポリーナを始め、シーフの少年も他の生徒も眉を下げ、周りを伺うよう見合わせた。
「私がこの学園に来て日々生徒に物事を教え、五年間という長い間授業を受け持った生徒達が今主張している事は、私の理想とは掛け離れたものだったからだ」
「で、でもバランスの良いパーティを、と言ったのは教官ですよ？」
ポリーナが手を挙げる。教官は髭を撫でつつ頷いた。
「ではバランスの良いパーティとはどんなものだろうか。成績の優秀な魔術師に成績の良いシーフ、誰もが腕を認める戦士。こんなものかね？」
メザリオ教官は言い終わるなり「私は違うと思う」と否定した。
「腕の良し悪しはとても重要な事だ。難度の高いダンジョンに挑む場合を考えても、誰か一人が足を引っ張ったばかりに全滅、なんて事態が容易に想像出来る。では『何をもって優秀とするか』について考えてみよう」
教官はポリーナ、そしてわたしを指差す。わたしもポリーナもびくり、と身を引いた。
「まずリジアとポリーナ。リジアは……まあ皆も知っているように

魔法の使用、特に制御に関して非常に苦労している生徒だ。そしてポリーナ、彼女はクラスの中でも魔法の使用に関してとても器用だ。不得意分野も無くバランスが良い」

言われたポリーナは胸を張り、横目でわたしを見てくる。むっとするが教官の話しが続くので、そちらに集中する。

「しかし学科になるとそうとも言えないと、私はそう評価している。リジアのレポートはどの分野でも毎回、きっちり理論立っていて出来る範囲は狭くとも表題に沿ったものが出来上がってくる。着眼点や選ぶテーマも面白い。そしてポリーナ、君はレポートも優秀だ。優秀な生徒が選びそうなテーマを選び、どこか見覚えのあるものが多い。一番頂けないのは、言葉巧みにごまかしが多い事。理解していないのに理解したかのようなごまかしが多い」

ポリーナは徐々に身を小さくする。教官は一つ咳ばらいをした。

「魔法とは未知なるマナを解明しつつ、発動するもの。今のやり方だといつか躓くぞ？……かといって現在の評価が変わるわけではないので、勘違いしないように」

教官のきっちりとした釘刺しにわたしも身を縮ませる。

「次、シーフクラスの君だ。フィラヴィオ君だったかな？」

先程までのわたし達への詰め寄り様はどこへやら、シーフの少年は頭を下げる。

「君もクラス内では優秀な生徒だと聞いているよ。器用で体力測定値も申し分無く、真面目だと」

フィラヴィオは少し目を輝かせるが、ポリーナの話しを聞いていたので「油断できない」というように上目遣いで教官を見た。

「ただ成績に残せない要素、というのがシーフにおいては重要だと思われる。例えば盗賊の重要であり基本的な仕事『聞き込み』だ。君のように肩に力が入り、メモを構えた状態で詰め寄って来て、学園の事を聞かれても私なら警戒するね」

肩を落とすフィラヴィオの頭に教官はぽん、と手を置いた。

「しかし何事にも妥協せずに熱心になるというのはとても良いこと

だ。その長所は捨てないでいて欲しい。……一人一人に言葉を送りたいが、時間もあることだ。最後にしよう」

そう言って教官はヘクターを見る。少し驚いた顔をする本人よりも周りの空気が凍りつく。

「ヘクター・ブラックモア、君は『何を考えているか分からない』と言われた経験は？君は自分の気持ちを周りに伝えるのが苦手に見える」

「そうだと思います」

ヘクターは苦笑した。その答えに教官は満足そうに頷き、暫くゆっくりと歩き回る。

「このように人間の優劣など、色々な要素が組み合わさりすぎて測れないものだ。少々我の強いメンバーにヘクターのような子が入るというのは、私はとても面白いと思うよ」

教官が言い終わると詰め寄ってきていた生徒の全員が気まずそうに顔を合わせ、次第に溜息をつきながら立ち上がる。がっかりして疲れきったように肩を落とす皆へ、教官は手を叩いた。

「まあまあ、そう気を落とさずに。今言ったように一つ着眼点をずらせば君らに合った優秀なメンバーは必ず見つかるよ。メンバー内での『輪』を作る、これも忘れないでいて欲しい」

そう締めくくり、長い演説を終えたメザリオ教官は満足そうに髭を触るのだった。

カフェテリアから出て行く最後の一人を見送り、にこにことご満悦顔だったメザリオ教官にローザが近づく。そして身を寄せるようにしてから肩を叩いた。

「嬉しい評価をどうもありがとうございます！で、これ、承認していただけるってことでよろしいですよね？」

満面の笑みでローザが広げて見せたのはメンバー編成書。わたし達がじっと見つめる中、教官はぽりぽりと頬を書き、大きく息を吐

いた。
「成り行きとはいえ、そうだな」
そう答えると腰を屈め、テーブルに腕をついてペンを走らせる。メンバーの名前が並ぶ最後に達筆な文字でサインを書きこんだ。思わず全員で拍手する。やったやった！などと騒ぐわたし達を暫く見ていたが、ふと思い立ったように教官はヘクターの方に向き直った。
「それで一つ気になったんだが、どうしてまたこのメンバーに入りたいなんて思ったんだ？」
ぴたりと全員が止まる。わたしも凄く気になっていたことだ。全員の視線を浴びる中、ヘクターはゆっくりと口を開く。
「あー、……面白そうだから？」
その答えにローザと教官は頬を引きつらせ、イルヴァとフロロは手を叩き合う。アルフレートが「『から？』って聞かれてもな」とぼやく横で、わたしはちょっと変わった人だな……などと考えてしまった。

翌朝、騒がしい学園廊下を欠伸しながらやってくると、わたしは手荷物を入れる為に廊下に設置されたロッカーを開ける。そしてすぐさま固まってしまった。
「まあ、凄いこと」
あまり思ってなさそうな声に振り返ると、わたしのすぐ後ろに立っていたのはクラスメイトのキーラ。朝からお色気満点な顔で美しい金髪をかき上げる。
「聞いたわよ、学園の人気者を引っ張ってくるのに成功したんですってね？」
にこっと笑うキーラは何だか楽しそうに見えた。わたしは「ま、まあ」と口ごもる。
「教官からも認められたみたいで良かったじゃない。でも、そのロッカーへの悪戯は序章と思った方が良いのかも」

キーラが言うのはわたしのロッカーの中の惨状のことだ。もう一度確かめる為に振り返る。

外から見た時は普段と変わらず綺麗だったというのに、中は酷い有様だ。まず目に付くのが背面部分に大きく書かれた『呪う』の文字。物騒な言葉が物騒な赤い字で書かれていた。

「これ、血……じゃないわよね？」

キーラが眉をひそめる。

「じゃないと信じたいわね」

わたしは答えながら中の側面に目を移す。びっしりと黒インクで書かれた文字は『破壊魔女』やら『問題児』などのくだらない落書きに始まり、「絶対に認めない、なぜなら～」という気合の入った長文までである。

キーラの「それ何？」という言葉に扉の裏側を見ると、何かのレポート用紙が貼り付けてあった。表紙を見ると「マナと四大元素」というお堅いタイトルにポリーナの名前が記されていた。思わずわたしは苦笑してしまう。キーラが不思議そうに首を傾げた。

「どういうこと？」

「優等生の負けず嫌いが発動したんでしょ」

ぱらぱらと中を見ると徹夜で書いたのか荒い字が並んでいた。最後のページに「どうだ！」と書いてある。これ、評価しなきゃいけないんだろうか？

「荷物は荒らされてない？」

キーラが元々入れっ放しにしていた辞書やテキストを確認する。

「大丈夫そうね」と呟くと、こちらを見てにこっと笑った。

「もし荷物にまで被害が及んだらちゃんと言うのよ？その時は私も暴れてあげる。私、こういうの大嫌いなの」

にこにこと言うも言葉の最後には殺気を感じてしまった。この見た目の彼女だもの。きっと今までした苦労があるのだろう。わたしはというと生まれて初めて浴びた嫉妬という馴染みないものに「物語の主人公みたいだな」とぼんやり考えていた。

「そういえばキーラはメンバー決まったの？」
わたしが尋ねるとキーラは一瞬の沈黙を見せ、髪をかき上げつつ答える。
「まあね、前々から約束があったから」
余裕の言葉である。さすが同級生以外からもモテる女は違う。キーラの長い睫毛を見ていると、廊下の窓から何かが覗いたのに気がついた。
「またフロロ、そんな所に乗って」
わたしは窓枠に腕を乗せ、外から廊下に身を乗り出す猫耳男を睨む。
「連絡だよ。今日も授業終わった奴から集まって、ミーティングだ」
言い終わるなりふっと消える姿に悲鳴を上げそうになる。慌てて窓に駆け寄り表を見ると、元気に中庭を駆けていくモロロ族四人がいた。ここ三階なんですけど。
「気合入ってるわねー。ミーティング重ねる過程で仲良くなれるといいわね」
意味ありげな笑みでこちらを見るキーラにわたしは慌てる。
「な、何でよ、そんな不純な動機で仲間になったと思われたくないもん」
それを聞いて「誰とは言ってないのに」と笑いながらキーラは去っていく。朝から変な汗を一杯かいてしまった。

冒険へ出掛けよう

出席予定の授業も終わり、わたしはミーティングに参加する為に階段へと走る。その時、

「リジア・ファウラー」

聞き覚えのある声に背筋が伸びる。曲がり角からやってきたのは眼鏡を光らせたコルネリウス教官だった。タイトスカートから伸びた足をきびきび動かしこちらに向かってくる。

「メンバー編成書も提出して、承認されたようですね。おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

怒られているわけでもないのに緊張してしまう。今日は嫌な汗をよくかく日だ。

「彼のような学年でも期待のかかる生徒が入ったということは、貴方達にもそれなりの期待が寄せられるということです。これまでのような行いではいけないということですよ」

もう一度教官の眼鏡が光る。わたしは可笑しくもないのに笑顔で歪む顔で「はあ」と答えた。すると教官の目線がわたしの後ろへと動く。つられて振り返ると、黄緑色の髪の下に陰鬱とした表情を浮かべるディーナが歩いてくるところだった。

あの後、メンバーを見つけられたんだろうか。というか話し掛ける段階をクリア出来たのだろうか、と思っているとコルネリウス教官がディーナの名前を呼んだ。ディーナがはっと顔を上げる。

「貴方もパーティが決まってなかったわよね、ディーナ。どうしました？」

「あ、あのう、私……」

しばらくもじもじとしていたディーナだったが、答えにくそうに口を開く。

「私、『研究科』への試験を受けてみようと思って……」

それを聞いてわたしは正直、残念だな、と思っていた。特に仲が

良いわけではないけど、彼女が普段の聞こえてくる会話では通常のクラス、つまりわたしと同じように冒険者を目指す道を希望していたことを知っていたからだ。

頑張ろうよ、という言葉をかけるもの白々しい気がする。それに全く運だけでパーティを組んでしまったわたしが言うもの気が引けた。そしてこのまま会話に参加してていいのだろうか、と教官を見ると、びっ！と指示棒が伸びるところを見てしまった。

「いいですか？」

きらりと光る眼鏡にわたしとディーナは飛び上がる。教官のこの仕草が出る時は怒っている時だ。

「貴方、進級前の面談では通常のソーサラークラスにそのまま残ることを希望していましたよね？もちろん研究科は六期生から用意される制度です。一年あるのだし、希望が変わる生徒もいるでしょう。しかし、貴方のその姿勢がよろしくない」

ぱし！と自らの手に指示棒を叩きつけるコルネリウス教官にディーナ、そしてわたしの姿勢も伸びる。

「前々から貴方が迷う素振りを少しでも見せていたなら、私も納得しましょう。でも貴方はつい先日まで冒険業に赴く希望を話し、旅の日々を夢見て未来を語っていましたよね？さあ、どういうことでしょう？それに、そのような姿勢で入ってくる生徒を研究に日々まい進する研究生達が受け入れてくれるでしょうか。彼らは彼らでエリートなんですよ？」

「あ、あの私……」

何故かディーナがわたしに救いを求める目を向けてくる。が、この教官に反論するなんて冗談じゃない。

「……貴方また諦めましたね？」

教官のすっと細めた目がディーナに突き刺さる。すると、

「ご、ごめんなさい！私無理です！男の子に話し掛けるなんて出来ません！」

顔を覆ってディーナが泣き出す。うわあ、うわあ……。

「よろしい！」
　一際大きな声が響き渡り、わたしは再び飛び上がる。指示棒がディーナの顔に伸び、彼女も驚きで涙が引っ込んだようだった。
「よくぞ正直に不安の核を口にしました！貴方はいつも何が怖いのかも言わずに逃げているばかりでしたね、ディーナ。『男の子に話し掛けるのが怖い』よく分かります。年頃ですもの。でもね、長い人生を考えるとくっだらない！実にくだらない問題です！」
　ここでこほん、と一つ咳払いするとコルネリウス教官はディーナの肩を叩く。
「私がディーナに言いたいのは、立ちはだかる問題を口にすること。問題を明確にして対処すること。何事もやってみてから、それで駄目なら諦めましょう。まずは人見知りの対処方法から考えていきましょうか」
　この言葉を受けてこくりと頷くディーナに、わたしは思わず拍手する。が、鐘の音にはっとした。いかん、わたしはわたしでやる事をやらなければ。
　わたしはこっそり一礼すると『男なんて怖くない！』という講義に移り変わりつつあるその場を後にした。

「さあ今日はこれを埋めていくわよ」
　カフェテリアの片隅、昼時は過ぎた為生徒の数は少ないが、遅い昼食を取っている先輩の姿もある。その中、集まったわたし達にローザが掲げて見せたのはまたも一枚の用紙だった。
「何これ？」
　わたしが聞くとローザは大きく頷いて見せる。
「個人のスキルを記入していくの。やりながらお互いに確認し合えるしね。これを教官に見せると、それに基づいたクエストを紹介してくれるわけ。まあ『演習』はどれも大したものは無いだろうから、とりあえず形だけって感じじゃないかしら」

説明を聞きながら記入用紙を見る。名前を書く欄と白い空白のマスが六人分ある。あとは教官のサインを記入する余白だけの簡単なものだ。

「じゃあ手始めにあたしから行くわよ」

そう言ってローザはぽん、と手を叩く。

「プリーストクラス所属なんだから当たり前だけど、専門は『神聖魔法』よ。大地母神フローからの慈悲を頂く形態ね。他の魔法もそれなりに基本は抑えてるけど、得意分野は治癒だとかそういうものだと思って頂戴」

追加で「さしずめ癒しの女神ってところかしら～」と言うとフロロが顔を歪める。

「何よ、その顔。あんたの擦り傷、どんだけ治してきたと思ってるのよ！……次、どうぞ」

ローザは隣りにいるイルヴァに手のひらを向けた。イルヴァがウォーハンマーを手に取り、立ち上がる。

「イルヴァはハンマーさんしか使えません。授業で一通りの武器を使いますけど、ソードもスピアもヘタクソです」

「……終わり？」

確認するローザにイルヴァは「あ、あと力持ちです」と拳を握ってみせた。

「じゃあ、次」

ローザの声に、

「私は何でも出来る」

「俺も何でも出来る」

と妖精二人が胸を張る。わたしとローザはわざとらしい程、大きく溜息をついた。

「何で一々突っ込まないと出来ないかな……あんた達のその細い腕でイルヴァのウォーハンマー振り回せるの！？」

「いいわよリジア……、じゃあ得意なことを教えてちょうだい」

ローザの言い直しにアルフレートは胸を張る。

「精霊魔法だ。なぜなら私は精霊を統べる者、エルフだからな」
そう答えてから「なんだ今の子供に聞くみたいな言い方は」と身を乗り出すが、隣りにいるフロロがそれを遮った。
「モロロ族っていうとどんな印象持ってるよ、にいちゃん？」
フロロに指差され、ヘクターは目を丸くすると飲んでいたカップをテーブルに置く。
「すばしっこくて器用だね。盗賊ギルドに行くと半分が君達だって話も聞いたことあるよ。シーフに成るために生まれた種族みたいだな」
「そういうこと！その中でもとびきり優秀なのが俺なんだな。……で、アンタは何をしてくれるんだい？」
フロロの言葉に話し手がヘクターへと移る。一度、腰に携えたソードの柄を触るとヘクターは口を開いた。
「イルヴァと似た感じかな。俺も剣の扱いには自信があるけど、他は駄目だ」
「一個自信があるって言えるものがあるなら十分じゃんよ」
フロロの意見には同感だ。わたしはというと、何を売りにすればいいのかな。皆の視線を集める中、言葉に詰まる。アルフレートが「校舎破壊だ」と言ったり、フロロが「デーモンとかオカルトめいた話しになると長いぜ」などとうるさい。するとヘクターがこちらに顔を向ける。
「受けてる授業でいいんじゃないかな。この紙に書くのも、そういうことだと思うよ」
そう言ってローザの持つ用紙を指差す。なるほど、そういうことなら、とわたしは頷いた。
「ローザちゃんみたいな神聖魔法は使えないけど、他の魔法なら一通り習ってるよ。専門は『古代語魔法』。あとは言語学とか地理学とか、そういう分野は得意かな」
ローザがぱちぱちと手を叩く。わたしはほっと息をついた。ヘクターの前で話すこともそうだけど、皆に改まって自己紹介するのも

恥ずかしいものだな、と思う。
ローザは記入用紙を置き、ペンを握り締めてにっこり笑った。
「じゃあ！書いていくわよ！いよいよだわ～！演習クエストは『お使い』か『モンスターの巣の掃除』くらいだけど、ある程度選ばせてもらえるんですって～」
「なんだ、そんなものか。もっと大きな獲物を狙いたい。血沸き、肉踊るような……」
アルフレートのうっとり顔を押しのけてフロロが手を上げる。
「俺、あったかいところがいい～」
「イルヴァは海に行きたいです～」
一気に騒がしくなるメンバーをヘクターはにこにこと見ていた。
わたしはその様子を眺め、何とも言えない安堵感に包まれるが、ふと思い出す。
……そういえば、ヘクターに『リーダーになってください』って肝心な部分を伝えてない気がするんだけど。いいのかな。
「……まあいいか」
わたしはそう呟く。微笑む彼の横顔を見ながら、今更逃げられても困るのだ、と拳を握り締めるのだった。

出発

馬車は揺れるよ、どこまでも。

まだ暗い中に出発したのだが、今は大地を暖める日差しがさんさんと輝いている。遠くには種を蒔かれたばかりの茶色い畑が広がって、緑広がるこの辺りと景色を二色に分けていた。

無事にパーティを組み終わり、いざ初冒険の地へと向かうべく馬車に揺られているわたし達。暫しのお別れ、ウェリスペルトの町。

「おやつ持ってくれれば良かったですう」

そうイルヴァがぼやく。本日の格好はタンクトップにホットパンツ。レザーアーマーを着込んだその姿はかなりまともだ。本人曰く「アマゾネスルック」といっていたその服装に、コルネリウス教官あたりにかなり強く言われたのであろうと想像した。

言ってきく子ではないと思っていたのだが、イルヴァなりにこのパーティのことを考えてくれたようで嬉しいかぎりだ。

ローザが投げた何かが馬車内を飛んでいく。イルヴァは器用にそれをキャッチした。

「家の姉様が焼いたクッキーよ」

「ありがとうございますう」

緊張感がない雰囲気の中、わたしはすでに遠くになってしまった町を眺め、旅の出発を噛み締めた。期待でいっぱいの胸の中に、ちらりと湧く早すぎる望郷の念。たった二、三日で戻るはずだというのに、なぜ旅立ちというのはこうもおセンチな気持ちにさせるのか。

そんなわたしの気持ちも知らずにアルフレートは、

「一曲歌おうか」

などと言いだす。

「止めて、耳が腐る」

ローザにぴしゃりと言い放たれ、アルフレートはむっつり押し黙った。

心地いい馬車の振動に身を任せていると、ふいに体が斜めになった。山道に入ったのだ。そのまま揺られること暫し、

「リジア！見て見て！ほら、学校が見下ろせる！」

ローザがはしゃいだ声をあげる。馬車が走るのはアルフォレント山脈。アルフォレント山脈はローラス共和国のほぼ中央にある。標高は大したことはないが距離の長い山脈だ。ローザの言うとおり、馬車から身を乗り出すとわたし達の学園のあるローラス共和国の一都市ウェリスペリトの町が眼下に見えた。

「こうやって見ると、すぐ近くにあるみたい」

わたしは呟きつつもちらり、後ろへ視線を移す。ヘクターが外の景色を見ながら柔らかい笑みを浮かべている姿があった。その姿を見ながら、いや、ずっとだ。「君らのパーティに入れてくれ」と彼が言った日から、わたしは気になっていた。

ヘクターはわたし達のことを「魅力的だ」と言った。でもわたしには……イマイチ彼がそう言った理由が分からなかった。もちろんわたしにとっては大事な仲間だけど、何というか彼がそう言ったのが意外だったのだ。わたしは長い間、ヘクターに憧れて遠くから見ているだけだったけど、その期間もここ数日で会話をするようになってからも、彼の印象は変わらなかった。

絵に描いたようないい人、が彼の印象だった。話し方は優しく嫌味が無い。困ったような顔はしても決して怒らない。そんな彼がわたし達のことを「魅力的だ」と言ったことは嬉しくもあり、意外でもあった。どう考えてもいつも彼の周りにいる人達とわたし達とでは雰囲気が違うのではないか。期待を裏切りたくない。良いパーティだと思ってほしい。常にそんな風に考えてしまう。

「俺も腹減った」

フロロの声に我に返る。そういえば朝が早すぎてわたしもお腹空いたな。

「着いたらご飯にしましょうか。少しくらい遅くなっても大丈夫でしょ」

ローザの提案にわたしとフロロは頷いた。
荷馬車を改造した、お世辞にも乗り心地が良いとは言えない小さな馬車に揺られてお尻がいい加減痛くなってきた頃、
「そろそろ着くよ」
学園から派遣された御者さんが馬の手綱を握りながら言った。
「おじさんはすぐに帰るの？」
わたしの質問に肩をすくめる。
「学校側からお使いも頼まれてんだ。買い物したらトンボ帰りさ」
それを聞いたローザが顔をしかめる。
「じゃあ帰りはバスかなにか探さなきゃ」
バスといえば一般的には馬より大型の生き物「コルバイン」一、二頭に二階建ての車体を引かせる大型の乗り物である。今乗っている普通の馬車に比べて乗り心地は良いし、何より早い。しかし今から向かう「チード村」はかなり規模は小さいという事だし、今走る道も狭い山道だ。バスのような乗り物は期待出来そうにない。
「チードってどんなところです？」
「冒険者たるもの、自分の目で確かめなきゃ」
わたしの言葉におじさんはニヤリと笑い、前を指差した。山間にぽつぽつと立つ建物が見え始めた。わたし達が向かうチード村である。山の中腹にあるこの村は山脈を越える旅人や商人の休憩地として栄えているのだという。

「結構栄えてるのね。もっと寂しいところ想像してたわ」
ローザが村の入り口から見える景色に感嘆の声をあげた。
そう、チード村は村とはいいながら建物の数も歩く人の数も多い。ウェリスペルトのような大きな都市に比べれば寂しいが、まずまず賑わったところだった。何よりお店が多い。きっと旅人の休憩ポイントになっていることからだろう。看板も宿のものが多いようだった。

御者のおじさんと別れ、予定より早い到着となった村を歩く。青空の下に広がるのは山頂までの緑と、その中をぐにゃぐにゃと伸びる歩道。脇に積み木細工のように詰め込まれた商店や民家が並ぶ様は、絵画で見た田舎町といった感じだ。普通の観光旅行で訪れても良い場所なんじゃないだろうか。

「依頼人ってどんな人なんだろうね」

わたしは少し不安な気持ちを漏らす。

今回の「演習」は学園の生徒が受ける教育課程の一つになってはいるものの、その全てが実際に学園に来た本物の依頼なのだ。もちろん依頼主も学園外から「お助けお願いします」と言ってきた人達になる。これが緊張の元になっていた。

いつもは若手の教官や教育課程を終えた五、六期生が捌いている依頼を、簡単そうなものを選り分けてわたし達が「演習」として行う。

依頼人には許可を取ってあるし、実際現地にも教官達が一度足を運んでいる。まどろっこしいやり方をとっているが、そこは「未来の冒険者」達の為。一般の方達も協力的なのが嬉しいことである。

正規の冒険者に、ではなく学園にわざわざ依頼をよこす時点で大した依頼はなかったりもする。

学園にくる依頼の中で一番多いのが「お使い」と呼ばれるものだ。隣り町までポーションを買いに行って欲しい、マウニの森まで行ってキノコを採ってきて欲しい、等の依頼がそう呼ばれる。

お使いなどの簡単かつ面倒な依頼は嫌がる冒険者が多いので、学園を重宝している人も多いのだという。正規の冒険者を雇うよりもずっと安上がりというのが一番の理由かもしれない。

わたし達が選んだ依頼は、やっぱりお使い。ここチードで研究をしている科学者、という人の研究材料の調達である。選んだ理由は単純に科学者という存在が珍しく、興味を引かれたからだった。

「捕って喰われたりしないだろ。それより飯、飯」

フロロがわたしを見ながらお腹を摩った。

小さな店舗が並ぶ中、広い間口で目立つ一件の大衆食堂を見つけ、ぞろぞろと入る。カウンターバーと大きな丸テーブルがいくつかあるような、酒場兼飯処、といった感じか。早い時間なのでカウンターバーに人はいないが、テーブル席で朝食を取る地元民らしき姿があった。

白いエプロンを着けた「元気いっぱい！」という言葉がぴったりな若いウェイトレスが近寄ってきて、大きなテーブルを案内してくれた。

各自思い思いの飲み物を頼んでいると、アルフレートがウェイトレスの女の子に尋ねる。

「バレットという研究家の家を知っているか？」

わたし達が向かうべき依頼人の家のことである。一瞬、女の子に戸惑いの色が見えた……気がした。村の中でも有名な人だから、と聞いていたので即答が無いことに違和感を感じる。しかし、

「バレットさん？この店の前の大通りを北に向かうと村のはずれに出るから、そこにある大きな屋敷だからすぐわかると思うわ」

戸惑いの色は気のせいだったのか、彼女はにこやかに答えた。

「さーてと、何食べよっかなー」

ローザの声にわたしは我に返りメニューに目を落とした。考え過ぎかもしれない。初めてのクエストに神経が高ぶっているのかも。

そう自分に言い聞かせながら、わたしはお腹を満たすメニューを選んでいく。いつもよりがっつかないようにしなきゃ、とヘクターの顔をチラ見しつつ考えた。

「ちょっと難しい人なのかもね」

決まったメニューをウェイトレスに伝え、彼女が厨房の方へ下がっていくとヘクターが小声で呟く。

「何で？」

ローザがきょとんとした顔で聞き返す。

「いや、名前が出た途端に店の空気が変わったから」

ヘクターに言われて何気ない素振りで周りをみると、何やらこっ

ちを見ながらこそこそと話す客や従業員の姿。躾がなっとらん。
「研究者なんて変人が多いからなあ。『科学者』なんて特によく分からんし」
フロロが天井を仰ぎ見ながら椅子を揺らす。
「……仮にバレットとやらが本当に研究者らしい研究者だったとしたら、依頼の中で嫌みのひとつも言われることもあるかもしれんが、私が言い返してやるさ」
アルフレートはそう言ってくれるが彼の場合、本気で相手の心臓を突き破るような嫌味を言いそうで少し怖い気もする。
しかしここまであからさまに町の人から注目されるバレットさんとはどんな人物なのか。わたしは自分の趣味の影響か、どんどん人間離れしたバレットさん像が浮かんでくるのを頭を振って消し去ることにした。科学者なんてわたし達も『珍しい』と思った職業の人だ。得体の知れない人種なのでお友達が少ない、なんていう話しだろう。

「おねえちゃん達、バレットのところに行くんだって？」
料理の半分程を平らげたわたし達に声を掛けてきたのは、隣のテーブルで一杯ひっかけていたおやじ。あからさまに酔った顔では無いものの、この時間から酒をあおっている時点であまり絡みたくない。
「そう……ですけど、何か？」
無視するわけにもいかないので、おやじに一番近い位置にいるわたしはそう答えた。
「何しに行くのか知らねえけどさ、気をつけた方がいいぜ」
そう言って手に持った黒いエールを一口。にやける顔を抑えているようにも見える無表情には、綺麗に整えられた顎髭がある。
「気をつけるって……何か問題でもある人なの？」
ローザが聞くと、おやじは顎髭をいじりながら答えを考えるように唸った。
「問題っていうか……、あんまり良い噂がないことは確かだな」
「悪い噂はあるんだな？」
アルフレートがずばり聞く。
「うーん……」
臭わせる割にはっきり物を言わない人だ。かといって適当にあしらう気にはなれない台詞じゃないか。
「俺達バレットって人から依頼受けてて、今から会いに行くんですよね。何か知ってたら教えて欲しいんですけど」
「あんまりおすすめしないな」
ヘクターの質問に答えたのは、空いたお皿を下げにきたウェイトレスの女の子だ。
「正直いってどういう人なのか、村の人もよく知らないのよ。ある日突然、だったしね、村に住み着いたのも。結構前になるけど未だ

に村には馴染んでないし」
　横でおやじも頷く。
「さっぱり姿は見せねえわ、しょっちゅう屋敷からでかい音が聞こえてくるわで気味悪いしよ。何の研究してるのかもわかんねーしな」
　本当に絵に描いたような研究者ってことか、と思ったら続くおやじの言葉にぎょっとする。
「噂じゃ人体実験してるなんつー話もあるし……」
「人体実験!?」
　わたしは思わず大声を上げる。オカルトめいた話しは好きだが、マッドサイエンティストといわれるような人物に憧れはない。しかし依頼人に会う前から妙な雲行きになってきてしまった。
　わたしの反応に女の子は手をぱたぱたと振る。
「噂よー、うわさ。なんかね、バレットさんの家に入ってく姿が最後になって行方不明になってる人達が結構いたりするのよー」
　そ、それって……結構大事な気がするんだけど。軽い言い方といいこの人達も普通の感覚じゃないような。
「な、なんか思わぬ方向に話が進んできたわね」
　ローザが呟く。
「これって……学校側も知らない話、よね?」
　言いたい事は言い終えたからなのかおやじとウェイトレスが去ったを見て、わたしはローザの肩を突く。「さあ?」とローザは肩をすくめた。
「そこまで含めての学園からのテストだったら、どうする?」
　ローザの言葉にまさか、とも思うがクエストとは一筋縄では解決出来ないものである、なんて事を普段から言われていたりはした。でも人体実験してるような極悪科学者の悪事を暴け、なんて見習いがするには荷が重いと思うんだけど。
「私、仲良い先輩方からお話聞いたんですけど……、演習の段階じゃ単なるお使いレベルのクエストしかなかったって話でしたよ?だからそんな難しい話じゃないと思いますよ～」

イルヴァの言葉にアルフレートは驚いて彼女の顔を見る。
「な、仲良い先輩なんているのか？その……お前が」
言いたいことは何となくわかる。しかしイルヴァはしれっと言い返した。
「はい、主にコスプレ関係の」
なかなか奥の深い世界である。濃い趣味なだけに横のつながりが強い、というやつか。
「ま、今聞いた話の全部が本当だとも限らないし、それに放棄するわけにもいかないしね」
「あんたわくわくしてない？」
明るく言ったヘクターに、ローザは呆れた声を上げた。言われたヘクターは慌てるように手を振る。
「い、いや……まあ多少バレット氏へ興味は湧いたけどね」
「だーから、このメンバーじゃ普通に事が運ぶわけないんだって」
にやにやしながらこちらを見て、楽しそうに言うフロロにわたしは深く溜息をついた。
「わたしは普通に運びたいわよ……」
しかし『おすすめしない』と言われても、じゃあ帰りましょう、というわけにもいかない。テーブルに料金を置くと、明るい日差しの村に出る。忙しそうな様子で通りを歩く商人達の姿に、現実に帰ってきたような安心感を覚えた。

「ここだな」
村はずれの一軒家を前に呟いたのはアルフレート。わたしは頷いた。
しかし……予想以上に大きい建物である。よく都会よりも人口の少ない村は家一軒が大きい、なんていうが、ここ山の中だよね？
目の前の家は「大きいお屋敷」のレベルを超えている気がする。周りを高い石壁に囲まれ、屋敷本体はつたに絡まれている。窓は少

なく、まるで巨大な箱がぼすん、と落ちてきたような印象だ。山間にある家とは思えない大きさは明らかに他の建物が並ぶ景色から浮いていた。土地を切り開くだけでも大変だったんじゃないだろうか。

「これを押せばいいんじゃないかな？」

ヘクターが門の左右にそびえる石柱、その右側についたスイッチのようなものを指差す。見ると「御用の方どうぞ」の文字。

「あ、それよ。押せば中でチャイムがなるから。うちにもついてる」

ローザが頷いた。さすが、というべきか。ローザの家はかなりのお金持ちなのだ。羨ましいことに、こういう庶民には縁のない物に異様に詳しかったりする。

「ここで押したものが中で鳴るんですか？」

イルヴァの問いにはわたしが答える。

「簡単な魔法装置の一種だからね。まだローザちゃん家とかここみたいに声が届かないような大きい家しかつけてないけど」

もっともそういう大きな家には大抵使用人がいたりするので、そういう面でもこの道具は普及していなかったりする。しかし町の人の話しからして、てっきり人嫌いで家に篭っているタイプの人間かと思っていたら、訪問客の為にこんな物を取り付けていたりとよくわからない人だ。

「じゃ、押すよー」

いつのまにかヘクターに肩車されたフロロがスイッチを押した。押してもこちらには何も聞こえないが、中では来客を告げる音が響き渡ったはずである。

数秒たった時だった。

ぎぃいいいい……と不快な金属音を立てて黒い大きな外門が動き出す。わたしは思わず身を引く。

「すごいですぅー」

手を掛ける人間がいないはずの門が開いていく様子に、イルヴァが感嘆の声を上げた。どこか薄暗い屋敷を前に一同は顔を見合わせる。少し躊躇した後、門の中へと足を進めた。屋敷の大きさの割に

は狭い前庭を通り、大きな扉の前に立ち止まる。
「なんか嫌な雰囲気……」
わたしは暗く飾り気の無い建物にそう呟く。村の人の話しを聞いた後なので余計に不気味な雰囲気に感じてしまう。
立派な玄関の扉を前に「どうするか」という空気のまま固まっていると、わたし達がノックするより早く、静かに開いた隙間から何かが顔を出す。
「どちら様ですかにゃ？」
わたしはその話し手の姿を見て一瞬驚く。猫である。フロロと違って耳やしっぽだけでなく、顔も体も猫。しゃきっと背筋が伸びているところを見ると二足歩行する生物のようだが、まさに猫そのもの。普通の猫より大きくてフロロと同じぐらいの身長だが、服を着ているわけでもなく茶の縞の猫。フワフワの体毛に大きな目、小さな手はどうやって扉を開けたのか不思議に思う程、猫のまんまだ。
同じように面食らってるヘクターだったが、すぐに我に返ったらしく猫に挨拶をした。
「こちらのバレットさんがプラティニ学園に依頼を出されたと思うのですが」
猫はそれを聞いてぱちぱちと瞬きした後、大きく頷く。
「ハイハイ。学園の方ですにゃ？お聞きしておりますにゃ」
最後の「にゃ」に悶えそうになる。いかん、かわいい。
「そうです、学園からきました」
ヘクターが言うと、猫は扉を大きく開けた。
「どうぞ、中へ。旦那様を呼んできますにゃ」
入るとエプロンを着けたもう一人（？）の猫。こっちは耳と手足の先だけ黒い白猫だ。
「にゃんが旦那様を呼んでくるにゃー。君はこの方たちを応接間へ」
茶虎がテキパキと言うと白猫が頷く。も、もしかして「にゃん」は「私」とか「僕」の意味だろうか。かわいい！かわいすぎる！
「なに身よじってんのよ、あんた」

「だって予想外の展開で……」
ローザの突っ込みにわたしは悶えながら答える。
「こっちですにゃー。着いてくるにゃー」
白猫の言葉に六人はぞろぞろと廊下を歩いていく。ぽてぽてと前を歩く白猫の姿にすっかりわたし達の雰囲気は和んでしまっていた。
「歩いて来たんですかにゃ？」
白猫に聞かれ、わたしは首を振る。
「村までは馬車で……」
「馬車はお尻が痛くなるにゃー」
猫でもそうなのか……。いや、猫ではないのか？
しばらく歩くと見えてきた廊下の突き当たり、そこに扉を構える一室に通された。窓は少なめだが、手入れの行き届いた広い部屋である。中央に大きな大理石のテーブルが置かれ、隅には大きなソファーもある。花が飾ってあったり、クロスやカーテンの趣味も良い。窓が少ないからか、天井からは明かりの魔法『ライト』を封じた魔晶石らしきものがいくつもぶら下がり、そのいずれも趣味の良いランプシェードがかけられていた。促されるままにテーブルにつく。
「今お茶入れるにゃー。旦那様もすぐ来るにゃー」
白猫がぱたん、とドアを閉めると、すぐに隣の部屋から物音がする。「にゃー」だの「なおーん」だの、食器のかちゃかちゃいう音もする。どうやら給湯室があるらしい。数匹の猫のあわただしい声がするのだ。
この時点でわたしの中ではこの家の嫌なイメージなどすっかり吹き飛んでしまっていた。

リーダー誕生

「君らが『卵』達かね。よろしく頼むよ」
わたし達がお茶を飲みつつ待っていると現れたバレットさんは、拍子抜けする程普通の人だった。
研究者特有の変わり者の雰囲気はうっすら醸し出しているものの、頭がボサボサなくらいで、柔らかい顔つきはむしろ良い人そうであった。歳は六十を超えるぐらいか。白髪で顔を覆い、同じ色の頭は寂しくなっている。小柄なので威圧感も無く、青いローブを着ている姿は魔術師のようにも見えた。
『卵』とは、学園外の人がよく使う、わたし達のような学生の愛称だ。
「君達を呼んだのはね、私の研究に必要な材料を付近の洞窟から採ってきてもらおうと思ってなんじゃが」
そこまで言うと、バレットさんは髭をさすりつつわたし達を見回す。
「若い子はいいのー。目がキラキラしとる」
と嬉しそうな声を上げ、にこにこした。おじいさんと言っていい年代の人から見るとそう見えるのかしら。
「で、話の続きじゃが、その材料というのが『ポゼウラスの実』でな」
ポゼウラスの実。わたしも魔術を習う身である。その存在は辛うじて、といった程度の知識でだが知っていた。
光を好まない植物、しかしながらある程度の温度湿度が必要な生態で、それゆえ洞窟などに生える珍しい植物である。洞窟といえば野良モンスターの巣になるのが世の常。そのため依頼してきたのであろう。
「その姿がわかる方はいるかの？」
わたしとローザ、アルフレートが手を上げる。わたしは図鑑で見

ただけの知識だが十分だろう。
「よしよし、なら大丈夫そうじゃの。で、この村から半日程の所に自然洞窟があるんじゃが、そこの奥に生えてるはずじゃ。小さい洞窟だから苦労も無いだろう」
「今までもそこで調達を？」
アルフレートの質問にバレットさんは頷く。
「ここに来て何年になるかわからんが、ずっとじゃ。今までは流れの傭兵に頼んでいたんじゃが、欲しい時期に丁度よく流れの傭兵が村にいるとは限らなくての。今回初めて学園に依頼したんじゃよ」
「じゃあ最後に頼んだ傭兵が、根こそぎ取ってない限りはあるはずだ」
アルフレートが一人呟く。彼がしつこく聞くのには訳がある。ポゼウラスはその珍しい生体ゆえ、あまり見かけることがない。ここにないから他を探そう、とはなかなかいかないのだ。自分たちの非がないとしても、行ってみてありませんでした、では後味悪い。『見つけてくるまで探し回れ』なんて言われないとも限らない。
「乾燥させて使うんですよね」
わたしが聞くと、バレットさんは満足そうに頷いた。
「そう、よく知っとるな、お嬢ちゃん。だから持てる限り持ってきてほしい。ただし、後先のことを考えて根は残してきてくれよ。根が残ればそこからまた成長するじゃろうからな」
「お茶のおかわりをどうぞにゃ」
会話が途切れた調度いいタイミングで猫達が紅茶を運んでくる。
「一緒にどうぞ」とカップケーキまで出された。オレンジの輪切りの蜜漬けが乗ったそれを見ていると、
「食べながら少し話そうじゃないか。そうだなあ、学園の話しなんて聞きたいねえ」
バレットさんににこにこと言われるが、皆顔を合わせて躊躇してしまう。こんなにのんびりしていて良いのかな。その気持ちを見透かしたようにバレットさんは手を振った。

「今日は時間も中途半端だから、出発は明日にするといい。寝場所と食事は提供するから、年寄りの話に付き合ってくれると嬉しいね」
「そういうことなら」
わたしは答える。こちらも珍しい学者の話を聞いてみたいところでもある。
バレットさんの質問により学園での授業やどんな教官達がいるのか、生徒の数、学校内の施設などを話していく。興味深そうに聞いていたバレットさんがわたし達一人一人を見回した。
「君らは何故、このメンバーで組むことになったのかね？くじか何かで決めたのか？」
バレットさんの問いかけにローザが「いえ、そうじゃ……」と言いかけた時、
「学園でも優秀な生徒の集まりですよ」
アルフレートがにこやかに答えた。「はは……」と何人かの乾いた笑いが響く。
「そいつは楽しみじゃの～。くじ引きじゃないとすると、生徒が自主的に組むということか。なかなかシビアじゃの」
わたしは頷きつつも、こんな話し面白いのかな、と思ったりする。しかしバレットさんは身を乗り出し質問を続けてくる。
「パーティの役割もあったりするのかね？例えばリーダーとか」
「この人です」
バレットさんの質問にローザが即答する。指差されたヘクターがむせこむ。
「え、ちょ……」
何か言いたげに全員の顔を見るヘクターだったが、全員から目を逸らされてしまい、最後にバレットさんと目が合う。
「やっぱりリーダーになる子は見た目も違うの～。お兄さん、男前じゃよ」
バレットさんの言葉に後ろにいた猫達がぱちぱちと手を叩いた。

猫達に泊まる部屋を案内されたのは、既に夕方近い時間になってからだった。用意された部屋は二つ。男女に別れ、わたしとイルヴァ、ローザが同じ部屋へ入って行った時は猫達も不思議そうな顔をしていたが、ローザのしゃべる姿を見て何やら納得顔になっていった。物分かりの良い子達である。

部屋は広さもベッドの柔らかさも申し分ないものだった。一つ気になるのはやっぱり窓が少ないこと。明かりを取り入れる為に上の方に横長の窓があるだけである。

「何か拍子抜けよねー」

ベッドにうつぶせに寝転んだローザが枕に顔をうずめ、唸る。

「うん、特に問題のある人にも見えないけど。付き合いが薄いだけなのかもね、村の人と」

わたしの言葉にイルヴァも頷く。

「田舎特有の陰湿さなんですよ」

……それはちょっと同意しかねるが。

でも村の人にも問題がある気がしてしまうな。バレット邸に入るのを最後に行方不明になった人がいる、なんて話しも見間違いなのかもしれないし。

「まあ無理矢理気になるところを上げれば、何で学園の事をあんな興味があるのか、よね」

わたしが言うとローザは首を傾げる。

「若い子の話しが面白いんじゃない？お年寄りってそういう方多いわよ」

とんとん、と遠慮がちなノックの音がする。

「はーい」

一番近場にいたわたしは扉を開けた。目の前にはヘクターの顔。

「うどあ！！」

わたしは思わず後ずさる。ここ最近の流れで少し馴れたとはいえ、顔アップはだめだ。

「今、大丈夫？」
ヘクターが言うと、その後ろからアルフレートとフロロも顔を出す。
「このお兄さんが何か言いたいことがあるらしいぞ」
そう言うとアルフレートは部屋にずかずか入ってくる。部屋をぐるっと見て一言。
「ふむ、部屋の質は一緒なんだな」
「デリカシーのないエルフねぇ……」
ローザがむくり、と起き上がった。
「で、話って？」
みんなが適当にベッドに腰掛けるのを見て、わたしはヘクターに尋ねた。
「いや、その、さっきの『リーダー』の話なんだけど……」
「ぴったりじゃない。他に誰がやんのよ。いよ！リーダー！男前！」
ローザの冷やかしにも、めげずにヘクターは手を振り遮る。
「いやいや、俺はさ、ここに入れてもらった立場なわけだよ。新参者がやることじゃないような気がするんだけど……」
「私がやるよりかはよっぽどマシですよぉ」
イルヴァの大変自覚ある言葉に、皆頬を引きつらせる。
「なら逆に尋ねよう。他に指名するとすれば誰がいい？」
アルフレートに顔を覗きこまれ、ヘクターは困ったように頭をかいた。暫く考えた後、ローザを指差す。
「ローザとかは？」
「あたし？リーダーっていうと何かと教官と話ししたり、あと依頼人と話すのも役割でしょ？無理無理、オカマだもん」
「じゃあアルフレート……」
「私か？言っとくが教官にも依頼人にもおべっか使わないからな。それと全員が私を神を崇めるならいいぞ」
それわたしが嫌なんですけど。そう思い、アルフレートの顔を睨んだ時だった。

とんとん、と再びノックの音がする。
『お食事ですにゃー』
扉の向こうからは茶虎猫の声。
「じゃ、そういうことで」
ローザは立ち上がるとヘクターの肩をぽん、と叩いた。
「応援してるぞ」
これはアルフレート。
「ヘクターさんなら大丈夫ですぅ」
これはイルヴァ。三人は順に部屋を後にする。そしてフロロはおもむろにヘクターの肩に乗ると、肩車の体勢をとった。
「さ、行こうか」
それを聞くとヘクターは溜息一つ、諦めの表情で立ち上がった。
ハラハラと状況を見ていただけの自分が情けない。
廊下に出ると茶虎猫を先頭にぞろぞろと歩く列。その最後尾にいる白猫がわたしを見てにやー、と笑う。
「今日のご飯は張り切って作ったにゃ。タンタもいっぱい手伝ったにゃ」
「あ、タンタっていうのね、あなた」
わたしは思わず顔がほころぶ。先端が黒い模様なのを見るに始めに部屋を案内してくれた猫だろう。
「こんなに大人数の食事頼んでごめんね。大変だったでしょう?」
わたしが聞くとタンタは大きく首を振る。
「にゃん達はお世話するの大好きなんだにゃー。お仕事いっぱいあると嬉しいにゃ。若い人ご飯いっぱい食べるから大好きにゃー」
若い人、っていうとバレットさんもそんな事言ってたな。しかし働くのが好きとは。彼ら皆がそういう性格なんだろうか。
「ウェリスペルトの学園にも行ってみたいにゃー。若い人いっぱいにゃー」
「一度来てみれば?わたしが案内するよ」
するとタンタは大きな目をぱちぱちさせ、ゆっくりと首を振る。

「……バレットさんに村から出ないよう言われてるにゃ。にゃん達とバレットさんとのお約束」
「あー、そうなんだ……」
わたしはそう呟き、タンタのぽてぽてと可愛い歩きを眺め見る。
村から出ちゃいけない、とは。どういうことなんだろう。

魔法と科学

猫達があわただしくカトラリーを並べる間をくぐって、夕食の席につく。テーブルを見渡すと、目の前にはオードブルらしき冷製ものが。他にも大皿のグラタンやらやたら大きなお魚の丸焼き、コールドビーフにキノコが散らばるサラダ。随分と熱のこもった歓迎ようだ。

「さあさあ、みんな席に着いたらいただこう」

バレットさんが奥の席からニコニコとした顔を向けてくる。

「すいません、何から何まで」

恐縮するヘクターにバレットさんは首を振った。

「私は普段、この子らとだけで暮らしとる。たまの機会、じっくり楽しみたいんじゃよ」

この子ら、とは猫さん達のことであろう。バレットさんと猫達は顔を見合わせるとにこー、と笑った。始めに会った茶虎に白猫のタンタ、他にも黒にお腹だけ真っ白な子や、三毛タイプにクリーム色の長毛種もいる。

「みなさんお若いから、今日はオレンジジュースにしましたにゃ」

三毛の子がそう言って、グラスにそそいでくれた。お礼を言うと、目の前の料理に口を付けた。ベビーリーフに油ののったお刺身がきれいに並べられ、バルサミコの匂いがするソースがお皿に線を描いている。

「おいしい！」

お世辞なしの感想を漏らすと猫達は嬉しそうに目を細めた。

「これってみんなあなた達が作ったの？」

わたしが聞くと、茶虎が頷く。

「食事はにゃん達で毎日作るにゃー」

ぶっ、とアルフレートが吹き出す。そこにがつ！と痛そうな音。隣りに座っているローザが、彼の足を踏みつけたのであろう。そう

いやアルフレートって変に潔癖なところあったっけ……。それにしても失礼な奴だ。

「バレットさんはどんな研究をしているんですか？」

誤魔化そうとしたのか、ヘクターがバレットさんに尋ねる。

「ふむ、主にやっているのは生活用品じゃな」

意外な答えにわたしは頭に「？」が浮かぶ。その顔を見たのかバレットさんは話を続けた。

「私は魔術も多少かじっとるが、あくまでも研究に必要な部分だけ。私は科学者でな。生活が豊かになるような発明品を考え、実用的に使える物を日夜研究しとる」

そこでワインを一口。

「ふう、例えばこんな夕食の支度なんかじゃな。この魚を焼く場合……、お嬢ちゃんだったら何を使う？」

わたしは問いに答える。

「これだったら、オーブンね。この大きさじゃフライパンじゃ焼けないし」

「そのオーブンは、どうやって温められる？」

「どうやって、って……火を焼べたり、最近じゃ魔力装置で簡単に火を着けられるタイプが出てきたわ」

「それを作ったのが私じゃよ」

「えっ……！」

絶句しているわたしの隣りから、イルヴァがのほほんと口を出す。

「へー、すごいじゃないですかぁ」

うーん……あんまりすごそうに聞こえない。本当に仰天するぐらい凄い事なんだけど。

バレットさんが言ったオーブンはほんの一例で、実際にはそのオーブンに組み込まれている着火装置がすごい発明なのだ。スイッチ一つで発火させ、さらには火の大きさの調節までしてしまう装置はオーブンに限らず、コンロやお湯を作る設備まで使われている。

家庭のキッチンをがらりと変えさせた発明に「この発明家に女は

感謝し、男は恨みに思った」という話しを授業で聞いたことがある。わたしが生まれた時からあるものなので、わずか十数年前の発明品と知った時は驚いたものだった。

「今はまだ魔術に頼っている段階じゃ。これからは魔法の力無しに……そうじゃな、照明のようなものが出来ればいいと思っとる」

なるほど、それで『科学者』というわけか……。もしかしたら門のベルもこの人の発明品だったりするのかもしれない。

「貴方にとって魔法と科学の違いは何だ？」

アルフレートも興味を持ったようで身を乗り出す。バレットさんは髭をゆっくりと触る。

「マナへの追求、かね……。魔術師、特に現代の魔術師はマナを解明出来ない粒子だと位置づけておる。これはかの偉大な大魔導師セシルが『マナの解明は不可能』と結論付けたことからじゃ。そこからマナの研究は止まっておる。嘆かわしいことじゃ」

「追求を続けるのが『科学者』だと？」

にやりと笑うアルフレートにバレットさんは頷く。確かに魔術師というと『魔法を使う人』みたいになってるもの。ソーサラーであるわたしにはちょっと寂しい話しだけど、自分がマナを解明出来るか、と聞かれると自信が無い。

「マナって何ですか？」

イルヴァがわたしを見る。わたしは少し頭を捻ると彼女でも分かりそうな言葉で答えることにする。

「いたるところに漂ってる魔法の源よ。これがあるから魔法は発動するって言われてるの」

「へー」

棒読みな返事だが分かってくれたんだろうか……。

「魔術を研究するのが魔術師なら、科学者は世の仕組みそのものを研究する者、というのが科学者の間ではよく言われることじゃな。……まあわしは細かい物をいじって作るのが好きなだけ、とも言えるがね」

バレットさんはふっふ、と笑った。
「俺もからくりは好き」
フロロの言葉にバレットさんは目を大きく開ける。
「おお！そうか！じゃあ君とは今度ゆっくり語り合いたいもんじゃの」
その笑顔を見て、わたしはフロロが物の『解体』が好き、という事を、教えるべきか躊躇していた。

まだ日の昇りきる前に、わたし達はもそもそとベッドから這い出した。バレットさん特製目覚まし時計を探り当てると、叩くようにして止める。
「むー……眠いー」
横から聞こえたローザの声にわたしは答える。
「わたしだって眠いわよー……。あ、イルヴァ起こして。絶対また寝てるから」
昨日はバレットさんときっちりデザートまで楽しんだ後、部屋に戻って毎日の習慣にしている呪文の詠唱の練習までしたのだ。わたしも寝起きが良いとはいえないが、初の冒険に赴く日にぐだぐだしてもいられない。
「おし！」
気合いを入れると部屋を出た。
「お目覚めかにゃー」
廊下をちょうど、白猫のタンタがお湯を持って来てくれるところに会う。
「ゆっくり寝れたかにゃ？お湯どうぞにゃー」
タンタがお湯の入った洗面器を渡してくれた。猫達もわたし達の出発が早いのに合わせて起きてくれているらしい。廊下の曲がった先から「にゃー」という声が微かに聞こえた。
「ほんと、何から何までありがとう」

「気にするにゃ。働くのが好きなんだにゃ。人がいっぱいいるとやることといっぱいで嬉しいにゃー」

そう言ってくるくると回ってみせた。本心から言っている様子にほっとする。初めて出会う種族だが世界でも数少ない種族なのだろうか。町では見たことが無いもの。

がちゃ、という音が廊下に響く。隣の部屋の扉が開いた。

「あ、リジア、おはよう」

少し眠そうなヘクターが顔を出す。

「あああおおおおおはよう」

心臓が爆発しそうになる。朝の挨拶からこの調子だ。この先、生き残れるのか、わたし……。しかし寝起きの顔を見たり見られたりするのは、やましいことなくとも気恥ずかしいものである。

「あのさ、アルフレートがどうしても起きないんだけど、どうしたらいい？」

困り顔のヘクター。ううむ、見るからに低血圧顔だもんなー、あのエルフ。

「大丈夫。意外と頑丈だから死なない程度にやっちゃって」

「うん、わかった」

わたしの言葉に真顔で部屋に戻って行く彼。……大分わたし達に馴れてきてくれたようで嬉しい限りだ。

イルヴァを叩き起こし、そのあと全員でアルフレートを叩き起こす。朝食もしっかりいただき（ふっかふかの焼きたてパンだった！）、なんとお弁当まで持たせてもらったわたし達。至れりつくせりな対応は高級ホテルに泊まったかのような気分で、これから洞窟に出かけるなんて雰囲気を感じられない。

出発の際には玄関扉の前でタンタがわたしの手を握り、

「がんばってくるにゃー」

と言ってくれた。わたしはぷにぷにの手を握り返すと、にっこり頷いた。

「いってきます！」

全員で大きな声で挨拶をすませると、まだ静かな村を歩きだした。

山の中、日の昇る前は薄っすら霧掛かっていて寒い。わたしはローブを首元までしっかり閉めた。来た時は賑やかだった看板が並ぶ通り、まだ人の気配は無い。ちちち、と小鳥が鳴く声がするだけだ。と思ったら、あの大衆食堂の前でウェイトレスの女の子が箒をかけていた。

「あら、随分早いのねー。……帰るの？」

そう声を掛けられ、わたしは首を振る。

「ううん、今からバレットさんに頼まれた物の調達よ」

「会ったんだ！どうだった？」

何だかわくわくした様に見える。やっぱりバレットさんを本気で気味悪がっているというより、半分面白がっているようだ。

「良い人だったわよ。一緒に暮らしてる猫も可愛くて」

ローザが言った感想にわたしも頷く。ウェイトレスの女の子は目を丸くし「へー」と呟いた。

「なら良かったじゃない。あれから結構、皆で話してたのよ。君達まで消えちゃったら、さすがに押し掛けた方がいいんじゃないかって」

わたしとローザは顔を見合わせる。フロロが間に入ってきた。

「そんな相談するぐらい、村人の失踪事件ってマジな話なわけ？」

「そりゃそうよ、だって騒ぎになった時は警備団の人まで来て捜査していったのよ？結局

『単に挨拶無しの引越し』で片付いたみたいだけどね」

再び微妙な空気になるわたし達を見て、ウェイトレスの女の子は慌てたように付け足す。

「でも実際に会って良い人だったんなら、それで良いんじゃない？」

「……まあね」

わたしはそう返すも、すっきりしない気分だった。

『にゃん達とバレットさんとのお約束』

何故か唐突にタンタの言葉が蘇る。どうして村から出られないのだろう。あんなに良い子達なのに。

「頑張ってきてね」

女の子の声に我に返る。「ありがとう」と伝えると、既に歩きだしていた仲間の元にわたしは走っていった。

リーダー、最初の試練

村を訪ねてきた時に使った道とは違う脇道に入り、半分獣道のような鬱蒼とした中を歩いていく。
「半日ぐらいって話だったわよねー。急げば昼ぐらいには着くかしら？」
小枝を踏みしめるぱきぱきという音が鳴る中、ローザが口を開いた。
「順調に行けばいいけど、日帰りは無理だと思った方がいいかもね」
あいかわらずフロロを肩車しっぱなしのヘクターが答える。それを聞いていたアルフレートがうんざりしたような声を出した。
「野宿ってことか？私は体力がないんだ。まいったな」
えっと、エルフって本来『自然生活をする人』じゃなかったっけ？一日の野宿ごときでぶーたれる妖精って一体……。
しかしそのアルフレート含めた四人に比べて、わたしとローザの歩き方は何だか覚束ない。同じような底のしっかりしたブーツを履いてきてはいるのだが、経験の差がでてしまっているようだ。体力が持つか早くも心配になってきた。
「それより気になってたんだけど」
フロロが話題を変える。
「ポゼウラスの実ってどんなもんなの？聞いたことないけど」
わたしとローザは顔を見合わせた。
「魔導をかじってる人間でもあんまり触れる機会が無いものだと思うわよ。マナの動きをほんの少しだけ鈍くするんじゃなかったかな」
「それだけ？」
わたしの言葉にフロロが眉をひそめる。
「だけ。……話し聞く限りじゃ、かなり特殊な研究しているみたいだからね。バレットさんしか知らない効果があるのかもしれないけど」

「バレットさんがやってる研究って魔法の反対、みたいな事言ってたね」

ヘクターの言葉に頷いたのはローザ。

「あたしも聞いたことないことばっかだったのよね。『魔導の力じゃない方法での照明』やらなんやらって」

わたしも大きく頷いた。

バレットさんが語ってくれた彼の研究内容とは、わたしの理解を超えたものだった。魔導の力を使わない照明器具、と彼は言っていたが、蝋燭や松明、はたまた光ゴケや精霊の力を借りるわけでもない『別の力』とは何なのか。わたしには分からなかった。

今主流になっている照明器具といえば魔晶石を使った「ライト」だろう。

魔晶石という魔法の力を封じたり、それを簡単なスペルで解放出来たりする恐ろしく便利なものが、古代文明の遺跡から見つかったのが数百年前になる。そのままだと強大すぎるそれを簡略化、大量生産にこぎ着けたのがわずか十数年前だ。そのプロトタイプに「ライト」等の簡単な魔法を封じてやると、あら便利。誰でも使える光源の出来上がりである。今ではデザインも増えて一般家庭にまで広がっている。それもこれも魔導の進歩の恩恵であると言えよう。

バレットさん自身がそれに大きく貢献しているのであろうことは、彼の「オーブン」の話でも想像がつく。何しろ彼はエレメンツの中でも扱いにくい「火」のエレメンツを、スイッチ一つでコントロールすることができる魔晶石を発明する、という偉業を成し遂げているのだ。わたしも発明者の名前を知らなかったのだが、まさかこんな形で会うことになるとは思わなかった。その彼が魔導の力を否定する研究をしている。彼はこう言ったのだ。

「不可思議な力を『魔導』『魔法』というのだ。人間は日々、真相の解明に努力するべきなのじゃよ。マナという力に頼るなかれ。人間は魔法に頼りすぎる」

その話しに魔術師を目指す自分を否定されたような気持ちにこそ

ならなかったが、わたしにはその内容も、その研究の意味でさえ…
…分からなかった。
「噂と違って良い人ではあったけど、まあ変わり者よね」
ローザの呟きにわたしは頷く。
「『良い人』になってたのは俺らにだけかもよ」
フロロがけっけ、と笑った。わたしは「やめてよ」と返しつつ、
ウェイトレスの女の子や酒飲みおやじの顔を思い出す。火の無いと
ころに、じゃないけど単に引き篭もりなだけで人体実験の噂なんて
立つものかしら。
「ただでさえ顔を合わせる面子が限られた人口の少ない村じゃ、あ
のじいさん浮きすぎてるからな。少々穿った見方されてもしょうが
ない」
アルフレートがニヤリと笑う。
「引き篭もり、『科学者』なんて得体の知れない職業、それに謎の
同居人達だ。なんせまるきり動物の猫の外見で、あんなに高知能な
種族、私でも見た事ないぞ」
わたし達より長い時を生きて来たアルフレートの経験したことは、
わたし達より圧倒的に多いのだろう。その彼も知らないとは。
「でも、怪しいだけで悪人扱いは違うと思うよ」
わたしはそう漏らす。その瞬間、足に鈍い衝撃。木の根に足を引
っ掛けたらしい。転ぶ、と思って息を呑んだ。
「……大丈夫？」
ふわりと体が浮いたような感触とヘクターの声。気がつくと腕を
取られていた。呆気にとられるわたしに「気をつけてね」と言って
彼はわたしの頭にポン、と手を乗せた。こ、これは。
「この道どっちに行けば良いですかー？」
先頭を歩いていたイルヴァが大声を上げる。
「そんなにでかい声じゃなくても聞こえるわよ」
ローザが呆れたように返した。と、アルフレートがわたしの顔を
見て仰天する。

「うわっ、お前どうしたんだその顔！」
わたしは顔から火を噴いている熱を感じながら呟いた。
「何でも無い……」
何か言い争っているローザとイルヴァにフロロが声を掛ける。
「左の下りになってる方の道に進みな。右方向から獣の唸りが聞こえる」
耳を微かに揺らしながら自信満々に言うフロロにヘクターが「へえ」と感心したような声を上げた。

その後も「どっち？」と聞くたびにフロロが適切な道を教えてくれる。バレットさんが持たせてくれた地図を見ると少々迂回した形になったりもしていたが、すぐに元の道に戻ってくるのが不思議だ。
「モロロ族がこんなに耳良いって知らなかったよ」
ヘクターが頭の上にいるフロロに言う。するとその彼の頭をぽんぽんと叩きながらフロロはにやりと笑った。
「俺と組むメリット、分かったかい？」
肩車される分際で偉そうな、と脇から思う。
徐々に道が広がってくるにつれ、頭の上を覆っていた木の葉や枝も開けていく。登りきった太陽から足元を照らす光と心地好い暖かさがもたらされていった。冒険というよりハイキングを楽しむのような気分になってくる。
フロロが何も言わなくなったので、地図通りに歩き続けること暫し、
「朝早かったから眠くなってきちゃったわあ」
ローザが欠伸する口を手で覆った。するとイルヴァが立ち止まる。
「何？」と口を開こうとした時、耳に聞こえてくる音があった。
ざざざ！と木の葉をかき分けてくるような足音だ。恐怖を感じた時には既に、黒い影が脇から飛び出してくる。
「コボルトだ」

ヘクターがロングソードを抜き、フロロが飛び降りる。目の前に飛び出してきたのはわたし達よりも数の多い集団。犬のような顔をしているが二足歩行で、短く細い手足は人のそれよりも歪で不気味に見えた。フロロより少し大きいくらいしかないが目が爛々としていて怖い。

実はモンスターと間近に対面するのは初めてというわたしは固まってしまった。彼らの手に持つ汚いナイフを見て喉を鳴らす。

「うわ！」

ヘクターの驚いた声と同時に、ふ、と黒い物体が鼻先を掠める。遅れて襲ってくる風圧に、イルヴァがウォーハンマーを振り回したのだと気付いて腰を抜かす。コボルトの集団の中心に振り下ろされた　ウォーハンマーが地面を揺らした。ぼごん！と鈍い音を立てて地面にクレーターを作る。

「いやあああああ！」

ローザの野太い悲鳴はコボルトに向けてではない。仲間の存在を忘れたかのようにハンマーを振り回すイルヴァから、コボルト達も含めて全員が離れていった。

「なんだあいつは！迷惑な奴だな」

アルフレートが舌打ちしながら走り去る。わたしも出来るだけ遠くに離れたいのだが、足に力が入らない。だって！一歩間違えればわたしの頭がぼごん！って！

腰を抜かしたままの体勢で後ずさる、という情けない動きをしていた時だった。

「ん？」

手に何か柔らかいものが触れる。しゅるしゅる、という聞きなれない音と共に顔の前に現れたのは銀色の長いものだった。ちろり、と赤い舌がわたしの鼻をくすぐる。思考停止状態の中、嫌悪の感情だけ爆発した。

「ぎゃあああああ！」

わたしの悲鳴に目の前の銀色の物体は動きを止めるが、「シャー

！」と大きな口を開けてくる。蛇だ、大蛇だ、毒蛇だ！と、再び悲鳴を上げそうになるが、すぽん！と景気の良い音と共に蛇は倒れる。光るロングソードとヘクターの顔が見えて安堵の息を吐いた。

「平気？噛まれなかった？」

ヘクターが心配そうな顔をしながら手を差し出してくる。それを戸惑いながら握り、立ち上がった。お礼を言おうとすると、ヘクターが何かを拾い上げる。

「ああ、大丈夫、こいつ毒無いよ」

だらん、とした彼の手の中にある物の断面図が見えた瞬間、わたしの中で何かがはじけてしまった。

「やだあああああ！ファイアーボール！」

「ひえ！」

わたしの手から放たれた赤い光の弾は、仰け反るヘクターのぎりぎりを掠めて空へ飛んでいく。山の連なる景色に走っていくと、ぼーん……と遠くから爆発音を響かせた。

「ちょっと落ち着いて話そう」

ヘクターが神妙な顔で発言する。皆のお昼ご飯を食べようとする手が止まった。明るい野原のような場所に出たので時間も調度良い事だし、持たせてもらったお弁当にしよう、となったすぐである。

「やだあ、リーダーっぽいわよ！」

と手を叩くローザにヘクターは「……ありがとう」と頷いた。そして皆の顔を見回す。

「ちょっとパーティの役割みたいのがバラバラになってる気がするから、確認したいんだけど」

そう言ってフロロを見る。

「さっきのコボルトの集団には事前に気付かなかった？」

「気付いてたよ」

平然と答えるフロロにローザが険しい顔で身を乗り出した。

「ちょ、ちょっと何よ、それ。それまでみたいに教えてくれればよかったじゃない！」
「聞かれなかったから」
そう言ってフロロは「うけけ」と笑う。面白くない。全然面白くない。
「……じゃあこれからは、フロロは『聞かれなくても』何か察知した時は教えてくれ」
あくまでも口調は優しいヘクターを心底尊敬してしまった。フロロの頷きを見ると、次はイルヴァに向き直る。
「イルヴァの方はちょっと気持ちは分かるんだ。……今までファイタークラスのメンバーだけで遠征したりしてたから、さっきみたいな無鉄砲に突っ込むやり方でも何とかなってきた。回りも動ける奴ばっかりだから気も使わないしね」
ヘクターのゆっくりと確認するような話しにイルヴァはうんうんと頷く。
「でもこれからはリジアとローザみたいに武器を持ってない人とも行動するんだ。二人を守るような形を取らなきゃいけない。まずは体勢を整えて、周りを見てから動いて欲しい」
「はい！」
イルヴァが元気よく手を上げた。アルフレートが「私は？私は？」とうるさい。
「アルフレートは……逃げるのすっごい速かったよね」
「そうじゃない、私だって手ぶらだぞ？なんで守る対象がこの二人だけなんだ」
ずるいー、を連呼するアルフレートの顔は完全に面白がっている。ヘクターが大きな溜息をついて肩を落とした。

口開ける魔物の巣

「いや～ん、おいしそうだわあ！」
お弁当の中身を見て、ローザが身をよじらせた。タンタ達が持たせてくれたお弁当は朝食べたパンで作ったサンドイッチだった。中身はツナやたまご、ローストビーフと野菜サンドもある。一生懸命作っている姿も可愛かったんだろうな、と思ってしまった。
「なつかしいなー」
ヘクターがタコさんウインナーをしげしげ眺め、妙に嬉しそうに口に運ぶ。こういう姿を見れるのも同じパーティという立場の特権だなあ、と頬が緩んだ。そんな風に油断していたからか、気がつくとわたしのお弁当箱にフロロが野菜を移動させている。
「ちょと！好き嫌いしないでこれくらい食べなさいよ！」
「肉が多いな……」
騒ぐわたしの横でアルフレートがぼやく。イルヴァがすかさずフォークを出した。
「じゃあ食べてあげます。そのかわり口付けないでくださいね。付けたのは食べられませんから」
「だから私はばい菌か？」
アルフレートが睨みつけているにも関わらず、イルヴァは彼のお弁当から肉類を奪っていった。それを見て思いつく。
「アルフレートが野菜を食べて、フロロが肉を食べればいいじゃない！」
真っ当な意見を言ったと思うのだが、二人は揃って首を振り「つまらない奴」と言ってくる。イライラするな。
「仲良いねー」
ヘクターがしみじみと呟いた。ローザがそんな彼の言葉に溜息つく。
「いや、こんな低レベルなやり取りにほのぼのしないでいいから。

……と、そうだリジア、あんた洞窟に着いても、中で魔法使わないでよ？」

厳しい顔のローザにわたしは「は？」と返すが、隣りでアルフレートも頷いている。

「な、何でよ」

「何でって……言わなくてもわかるでしょうが」

呆れた口調のローザの後をアルフレートが引き継いだ。

「みんな、死ぬぞ」

ごくり……。その言葉に全員が唾を飲み込んだ。

わたしの魔法への不信感が、先程のファイアーボールでダメ押しになってしまったようだ。山の一部が黒煙上げてへこんでいたら無理もない。

「で、でも何もしないわけにもいかないでしょう？」

わたしの辛うじての反抗にイルヴァがいつもの真顔のまま答える。

「リジアは何もしなくて大丈夫ですよー。モンスターが出てきたとしてもイルヴァがやっつけてあげます」

「さっきはわたしの頭を『やっつけ』そうになったくせに、よく言うわね……」

わたしは鼻を掠めたウォーハンマーを思い出して身震いした。

「まあ、良いように言えば、モンスター相手にも臆することないって頼もしいじゃないの」

ローザの言葉にイルヴァとヘクターは顔を見合わせる。

「授業ではモンスター相手にするなんて毎日のことですから」

そう答えるイルヴァにヘクターも大きく頷いた。

「俺達の授業じゃゴブリンやらコボルトやらの巣穴に突っ込まされるんだよ。それこそローラスの隅から隅まで被害を調べて遠征させられるわけ」

二人は眉間に皺寄せ、苦悶の表情を浮かべる。何やら辛い思い出らしい。

「トロールの集落に崖から蹴落とす教官もいますからねー」

そう言ってイルヴァはなぜかピースサインをする。
「な、なにそれ……」
ローザが呻いた。
そういやファイタークラスってしょっちゅう校外授業なんていっていない時多いっけ。泊り込みの遠征も多いみたいだし、魔術師科の授業に比べて随分ハードだ。
「あんた達は大丈夫そう？」
ローザが黙ったまま食事をする妖精二人に問いかける。するとフロロは手を振った。
「モロロ族の逃げ足を舐めるなよ。……それに旅は慣れてるしね」
なるほど。モロロ族は本来、定住生活をしない種族だ。旅から旅の生活ではそういうこともあるのだろう。彼が学園に留まっているのも不思議な事だし。
アルフレートの方はといえば、くだらない質問を、とばかりに返事もしない。
なんだか急に不安になってくる。わたしはモンスターに会うのも初めてだったし、魔法禁止令も出されてしまって、このメンバーの中ですら足手まといになりそうな気配がしてきた。
皆が食べ終わった昼食を片付け始めたことにはっとする。わたしもサンドイッチが包んであったクロスを畳むと立ち上がる。横で腰を伸ばす仕草をしているヘクターにそっと近づいた。
「あのー、さっきごめんね」
わたしの言葉にヘクターは目を大きくして瞬く。何の事か考えているようだったが、ふっと笑顔になった。
「ああ、気にしなくていいよ。俺も無神経だったなと思ったから」
「……蛇のこと？」
わたしの小声の問いかけにヘクターは「そう、それ」と言って笑う。わたしの謝罪も何の事か分かってくれたようだ。
「蛇見せただけで魔法ぶっ放されても許すんだ？にいちゃん優しいな」

フロロが早速、ヘクターの肩によじ登る。そのずうずうしさにむっとしていると、ヘクターがふ、と苦笑した。
「何ていうか、難しいね」
それを聞いてわたしは固まってしまう。
「さー、もう洞窟まで近いはずだから、さっさと行きましょう！」
ローザの張り切った声にイルヴァが拳を上げた。その二人に続くヘクターの後姿を見て思う。
どういう意味だったんだろう？じわじわと湧く不安は先程までの物より粘っこい。
どうしよう、呆れられたんだとしたら。
「やっぱこのパーティに入ったこと後悔してたらどうしよう……」
「『もう逃げられないぞ』って脅せばいいんじゃないか」
「……独り言に返事しないで、アルフレート」
わたしはいつの間にか横にいた、にやにや笑うアルフレートを睨みつけた。

バレットさんの手書きの地図を頼りに、この辺かと思われる場所を隈なく探していく。地図と周りの景色を忙しくなく見る動作に目が回ってきた。
始めはハイキング気分でいい気持ち、などと思っていたのだが早くも町の景色が恋しい。土踏まず辺りに違和感を感じてきた時だった。
「あ！あれじゃない？」
わたしが指差すのは山の斜面にいきなりぽっかりと開いた横穴だ。直前までの緑いっぱいの景色と違い、この辺りは灰色の岩で覆われている。洞窟の入り口は巨大な岩のお化けが大口を開けているように見えた。大きさはトロール一頭分ぐらいだろうか。中は暗く、入り口付近の様子しか伺えない。
入り口の前に来ると、

「ちょっと待った」
フロロがすっと音無くヘクターの肩から飛び降りる。そのまま地面に這いつくばり、猟犬よろしく付近を調べ始める。続いて洞窟の入り口辺りの壁を見ると満足げに声を漏らす。
「ふんふん……」
「何かわかった？」
ヘクターの問いかけにフロロはしたり顔で振り向く。
「ゴブリンの巣になってるみたいだね。見張りはいないみたいだけど、中から声も聞こえるぜ」
わたしも耳に手をあて音を拾おうとするが、もちろん何も聞こえない。
知能レベルは低いとはいえ、一応集団生活を営み道具の使用の知識もあるゴブリン。通常はこういった住処の前には見張り役なんかを置いてる場合が多いのだという。人間を見れば襲い掛かるような彼等は、彼等からすれば人間が敵だからだ。わたしは本でみた赤黒い肌の悪鬼を思い出し、ぶるりとする。
「縄張りの跡もあるな」
アルフレートが一本の木を見て言うのを、ローザは後ろから覗きこみ露骨に嫌な顔をした。わたしも近づき覗き見る。
「サイヴァの紋章ね」
黒十字を丸で囲んだ紋章。歪だが力強く、木の表面に刻み込まれている。この世の混沌を司ると言われる邪神のシンボルである。サイヴァは邪神の中でも一番メジャーな存在である女神だが、人間社会では信仰を法律で禁止する国が大半だ。此処ローラスでもそう。神殿や集会場の建設はもちろん、信仰自体も厳しく国の法で禁止されている。
しかしゴブリンのようなモンスターの間ではなかなか人気の神様ということで、このように自分たちの巣穴に、表札のようにシンボルを掲げることが多いらしい。
「ポゼウラスが生える洞窟、っていうのもここで合ってるのよね？」

「だと思うよ」
ローザの問いにわたしは地図を睨みつつ答えた。
「じゃあ……入るしかないわね」
ローザの声は少し不安そうだ。後ろを向けば日差しが木々を照し、光がきらきらと輝く何ともきれいな景色だというのに、この真っ暗闇に入り込まなきゃいけないのか。
アルフレートが無言でフロロに指を振る。フロロは「はいはい」と言いながら洞窟内に足を踏み出していった。そのすぐ後をアルフレートが続く。アルフレートが光の精霊を呼ぶ声が聞こえ、闇の中にふわりと光が浮かび上がった。
それを見たイルヴァが続こうとすると、
「や、やあだあ、置いてかないでよ……」
ローザが引っ付いていく。
も、もうちょっと心の準備とか欲しかったなあ。せめて「オッケー？」とか聞いて欲しかった。
そんな事を考えながら踏み出すのを躊躇していると、ぽん、と肩をたたかれる。ぎくりとして振り返る。するとヘクターがいつものように微笑んだ顔をわたしに向けていた。
「俺が最後尾になるから、リジアはその前にいてもらえる？」
「え、あああ……う、うん」
「あと、後ろにも明かりが欲しいな。何かないかな？」
明かり、と言われて一瞬頭が真っ白になるが、先程のアルフレートの詠唱する声を思い出す。するすると紐が解けるように『ライト』の呪文が頭の中で完成していった。一呼吸してから精霊を呼び起こす呪文を実際に口にする。
「ライト」
一つの光の球がわたしの頭上に輝いた。ヘクターが「おお」と感嘆の声を上げる。やってて良かった、毎晩の詠唱練習。
「リジア、まだー？」
すでに洞窟内を歩いているローザから声がかかる。

「さ、行こう」
「うん！」
ヘクターに返事をし、わたしは緊張が大分解れていることに気が付いた。きっと不安が顔に出ていたのだろう。それに気付いて解すきっかけを与えてくれたのだ。
すごい、と素直に思う。わたしは色恋など関係無しに、ヘクターのことを尊敬してしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3901y/

タダシイ冒険の仕方【改訂版】

2011年11月26日01時11分発行